

貞丈雜記

十

73
6822
10



- 養目一腰
- むらぎきの弓 圖
- 新敷弓 二ヶ条
- 本まゝ孫弓
- ぬき弦せき弦
- 神代の弓矢と事
- 弓と辻
- せきつり糸の弓
- 弓の長サの弓
- 矢束長サの弓
- そば白木の弓
- ぬき弓白木の弓
- 弓のせんん亭ふ
- ぬき弓矢
- つく弓の弓
- 梓弓檀弓楓弓柘弓柘弓
- 十張弓
- 巻ばありの弓
- 弓のたぎりを定る弓
- 矢よさらし籠と弓

- こころし弓の弓
- 矢の苦みくふヶ条
- 糸もぎの弓
- こころし弓の弓
- 弓の皮は口落さず弓
- のちちのころし弓 ふ
- 矢も根品 ふ
- つのぎより此弓 ふ
- かぎをもちと弓
- おひ征矢
- 矢よさらし籠の弓
- 紙もぎの弓
- うねしもぎの弓
- けうげの弓
- 矢のまぎす
- ぬきをもちす弓
- きり弓の弓 ふ
- 猿轡品と弓
- 犬射づら笠懸弓
- まちをもちし弓

- 一 丸根のりふ
- 一 指破 劔形ふ
- 一 萩藤の事
- 一 平根のり目
- 一 弓矢尺寸取せうのり
- 一 小弓のり
- 一 弾根の事
- 一 ひきやくむかのり
- 一 あほのかめこのりふ
- 一 矢音の事
- 一 弓の舌 蠅の尾 鱗の尾ふ
- 一 平題のり
- 一 くらき年膠のり
- 一 のりねのりふ
- 一 俣野矢のり
- 一 征矢のり
- 一 小苦草のり
- 一 羽よりのりふ
- 一 矢差のり
- 一 矢さげびのり

- 一 矢は内向外の兄矢ニヤ集
- 一 白矢弓
- 一 弓の雨の蛇をひくこのり
- 一 弓の外弁お竹
- 一 かくらゑば
- 一 矢志のり
- 一 雷上動水破兵破のり
- 一 白帯の羽もきたる矢
- 一 木竹合せるのり初のり
- 一 矢よやなのり
- 一 神通の痛矢
- 一 弓の糸の抄のり
- 一 箭のこふこのり
- 一 志きらのり
- 一 矢をつまるのり
- 一 後三年画るのり弓袋
- 一 まきのり
- 一 深羽の矢
- 一 丸木のり ニヤ集
- 一 うちむののり

一 さく羽のり
 一 犬射墓目笠掛引目のり
 一 弓の形古竹かきり
 一 弓にまきし薛をき
 一 竹筋
 一 手突のり
 一 百矢とまきり
 一 白菱のりのり
 一 公方様は弓袋
 一 上ぎりのり
 一 弓ねまきり
 一 引目をそへを射るり
 一 犬追おのりのにぎり
 一 夷弓のり
 一 糸罫のり
 一 引目をそへ獸を射
 一 八目の福矢
 一 弓杖を間おる
 一 雁股のり
 一 中ぎりのり

一 征矢上差中まきり
 一 空槍のり
 一 袴のり
 一 墓目と大小のり
 一 墓目とまきり
 一 矢のまきり
 一 さく筋のり
 一 だりばのり
 一 エッ懸四ッ懸のり
 一 そはまのり
 一 弓とまきり
 一 弦糸つるり
 一 笠掛引目ひき目のり
 一 袴のり
 一 ちく眞のり
 一 村守藤のり
 一 草筋のり
 一 墓石のり
 一 せんたんせん
 一 二重赤漆のり

唐詩鼓吹卷五
皮日休が圓載
上人日本三歸ルヲ
送ル詩二頁多紙
上經文勅云句
アリ其註三頁多
出摩伽園長七
人冬不凋トアリ
六七尺ト云ル註出
處オホツカシ

杖と書うらうら後成恩寺殿兼良公のありけりぬり
 公年根原と云書ふ弓をはたらくと云り天竺の具ガイ
 多羅葉ヨウの長七尺五寸弓の長も同く
 多羅葉ヨウの長七尺五寸弓の長も同く
 あり翻譯名義集と云書何り天竺の弓を書くと
 書あり其書ふ貝多羅樹といふ木の櫻櫛シユの如く
 ありしと云う長八九十尺花の粟の如く何人の云
 一多羅樹と云ハ高さ七尺ジを云一尺とハ七尺を云
 七尺ハ四十九尺と何りて七尺五寸と云るハ云々
 多羅樹の年を弓の年と云合してハ六年の出家
 ありしと云うもの弓の用ひごとく

弓矢を調度と云り調度テウダの年と云矢を
 武家の才一之道具あり故に矢を調度と云は後世
 日及て近代チキを兵具ヒヤウクの才一と云一番銃チユウを言ふと
 此のありて銃の弓を道具と云は同く心あり調度
 懸の役と云も弓矢を持つ役と云ハ彼等の類に記す
 矢をてうじにもてうじとも云大進物の書は公方極
 是れ大に持射は矢の弓をはたらくと云はてうじとも
 云事と云ありてうじとも調度と云トハト云音通

一
 矢をてうじにもてうじとも云大進物の書は公方極
 是れ大に持射は矢の弓をはたらくと云はてうじとも
 云事と云ありてうじとも調度と云トハト云音通

天本抄子六帖題
 氏勢能為家の
 考のあききや
 けきの里のの
 さくろ花よのみ
 むりりむらあ
 古物カハをす
 云よりてカハサ
 ラを云くけ
 カハサケラのカハ見
 まくよあ

まててうじと云はるげと云祠のゆこととて個度と云ハ
 毛矢の惣名あまことと貴人の出ら矢をとけん云ふ時
 弓をはあ〜とひ矢を以てうけと云る古の風俗
 一 矢よ切ぎけきと云はるゆみの木に阿海うらまんと云
 あり樞の木乃皮まんま〜いあやまり〜け事書札雑
 雑字あ〜とあり櫃マユの木にあまはま〜羽の上布をま〜
 一 矢乃根よらん志りと云物あり根の先を劔のぬ〜三
 角よ志〜と書札雑〜書よ云らん志〜をけん
 志〜とや書札由貴殿に作は〜貴殿とハ伊勢カ書
 志〜と云

- 一 征矢ソウヤのせりし〜おひをやのみことと書札雑〜
お見〜りおひをやとたえひ〜のさす征矢〜
私云うかう矢のま〜
 せ〜りおひをやとたえひ〜
- 一 十六矢よとづり矢をば〜ゆ〜廿五矢の時〜廿五
 の内を〜のけんとづり矢をさ〜添て廿五〜と
 書札雑〜書よ〜おひ〜のさす矢のま〜
とが〜矢一名
 とい〜云
- 一 矢を系よ〜す〜も〜左よりの系〜ハ右
 よりの系〜と〜小笠原流〜多〜豊後〜ハ〜
 ぎ〜秘事と云〜ハサシモノ〜見〜
- 一 墓目ヒメの木ハ朴ハクの木ハキリ相の木ハ略〜
 墓目の長サハ大方四寸〜強きハ大ひきめ

真丈云四寸マリ
五寸ハ細一五寸
マリ五寸一堅
の寸は一寸階
一五寸一堅
寸五寸ハ細
寸マリ一五寸

東鑑ハ引目の
字を用途訓從來
ハ墓目の字を引
目字ハ字ハ引目
と云き一五寸ハ
あり

弓のよみは小墓目を弓のよみ也
 又墓目と云ふは長サ四寸ある目の上のよみ也
 又墓目と云ふは長サ五寸ある目と云ふは
 又墓目と云ふは長サ五寸ある目と云ふは
 又墓目と云ふは長サ五寸ある目と云ふは

旧記ハ墓目と云ふ引目と云ふ書より
 又墓目と云ふ引目と云ふ書より
 又墓目と云ふ引目と云ふ書より
 又墓目と云ふ引目と云ふ書より

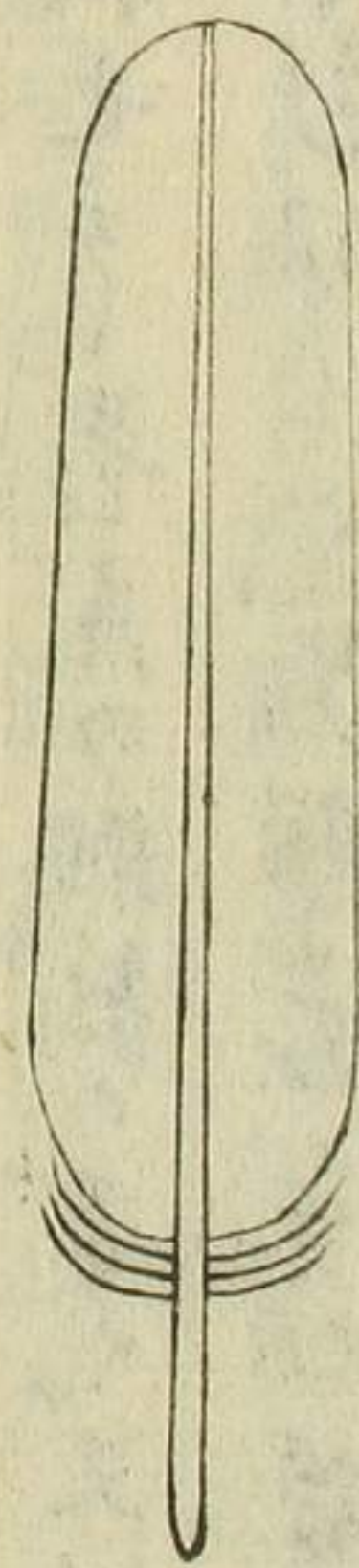
墓目の名は墓の音の如し
 又墓の目ハ木ノ物ヲ墓目トシテ夜
 生ノ物ヲ射ル故也
 又墓目ハ元来魔生ノ物ヲ射
 ル故也
 又墓目ハ元来魔生ノ物ヲ射
 ル故也
 又墓目ハ元来魔生ノ物ヲ射
 ル故也

眞鳥羽之辛
 黒つ羽を幸
 本向流開書云今
 小鳥羽として十二あ
 るをバカニロシと
 下あり大鳥羽を
 十四あるを眞鳥
 羽とてエチリカラ
 ワシノホロハ黒漆
 羽と云

け羽ハ右打ち云信て赤と云羽ハ軍陣ハ右打ちと云名ある
 亦大将の矢をハ石ボロ云々切符以下ハ箭の矢を云
 也又切符あるの箭の字ハ本ハ文の字ハ矢ハ羽の力也
 のきへく何のきを云へ切符の字ハ右打ちと云は羽の力也

烏羽

雪白
ユキシロ

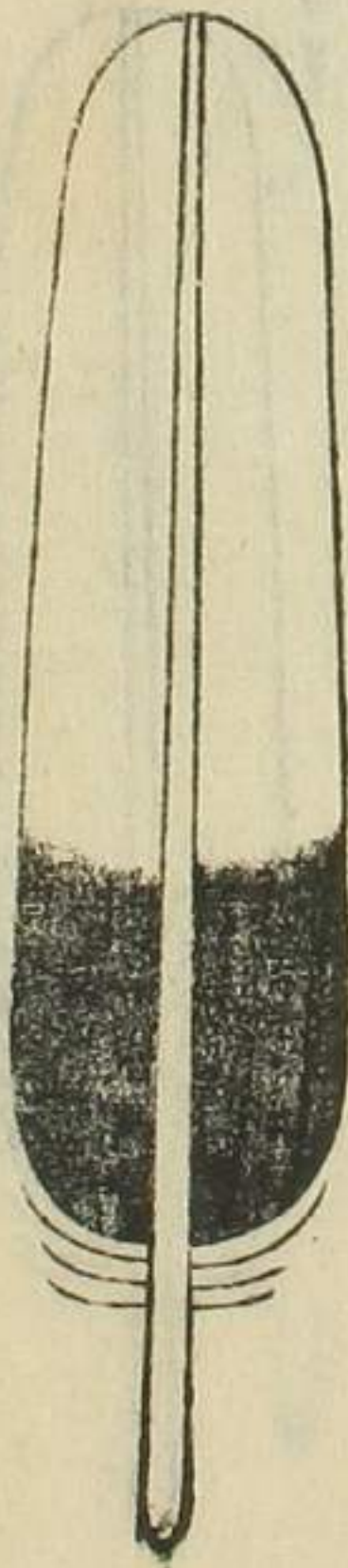


黒漆羽
モトグロ



此の字ハ心ありしは鳥の羽と云

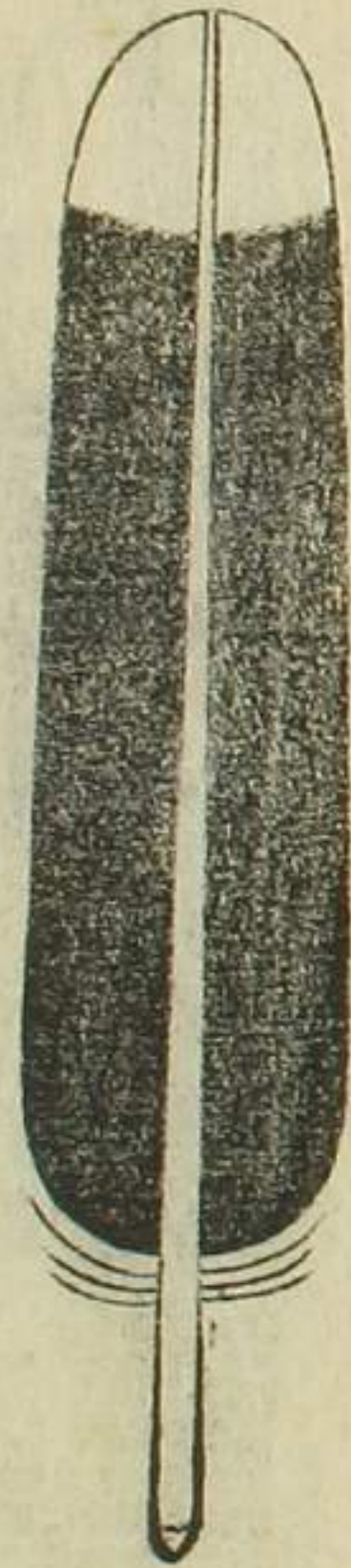
本黒
モトグロ



本白
モトシロ



妻白
ツマシロ



妻黒
ツマクロ



雜記十

六

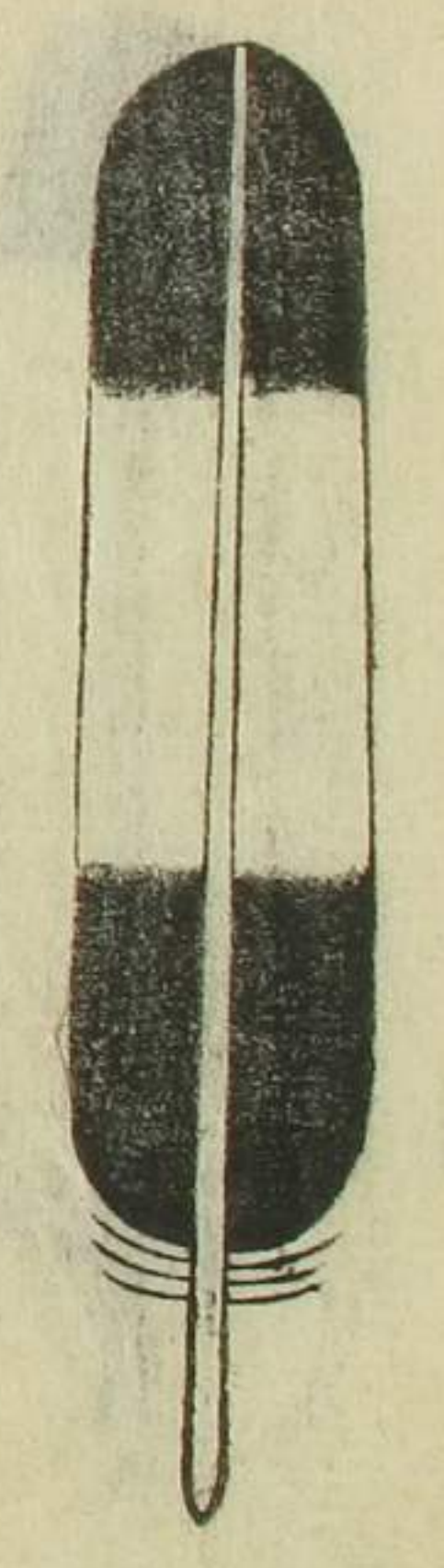
又獲水鳥とも
又方目とも云
又俗名梅首雞
とも書く江戸
まてむんと云き
あり

右真羽の圖は大方通用の羽はけお拾の文翫なり
 先羽の繪別は一書昔より傳來有り
 爲べうと云ハ本ハおまめおこおまめ名と云るの羽は如
 うと云くおすめ名と云ハ獲田鳥の事之係平盛衰記了
 獲田鳥尾と書かうすべうと云む之係名抄は鴛一名を
 澤虞即獲田鳥也係名ハ於酒賣止里と有りおすめ

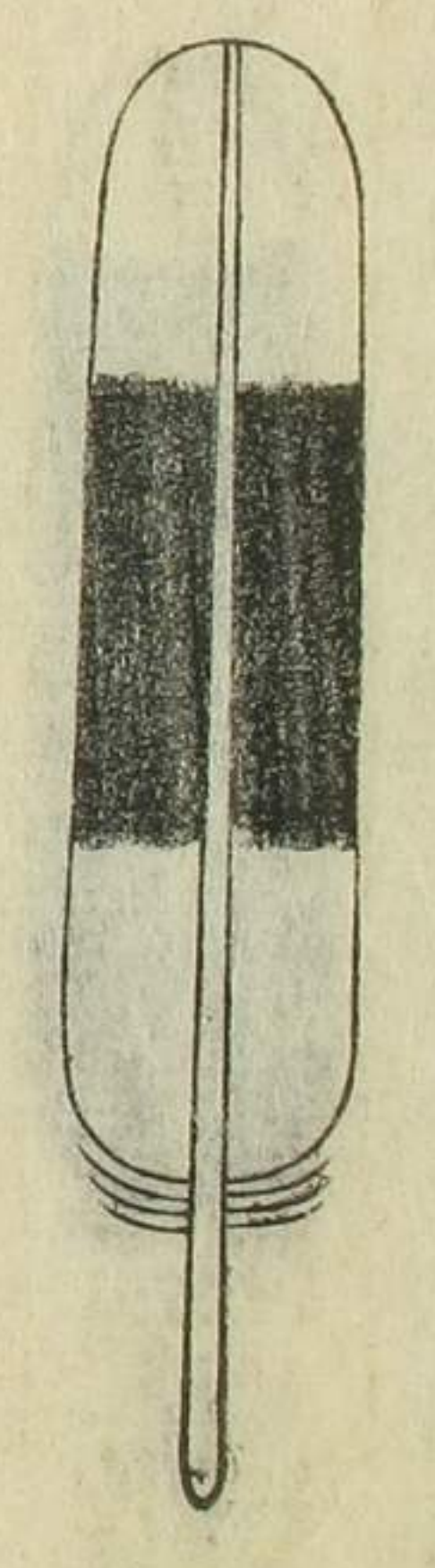
雑記十

七

ナカジロ
中白



カゲロ
中黒



キリフ
切文



うすへお



うすへお



カスラ
又
霞文とも云ふ

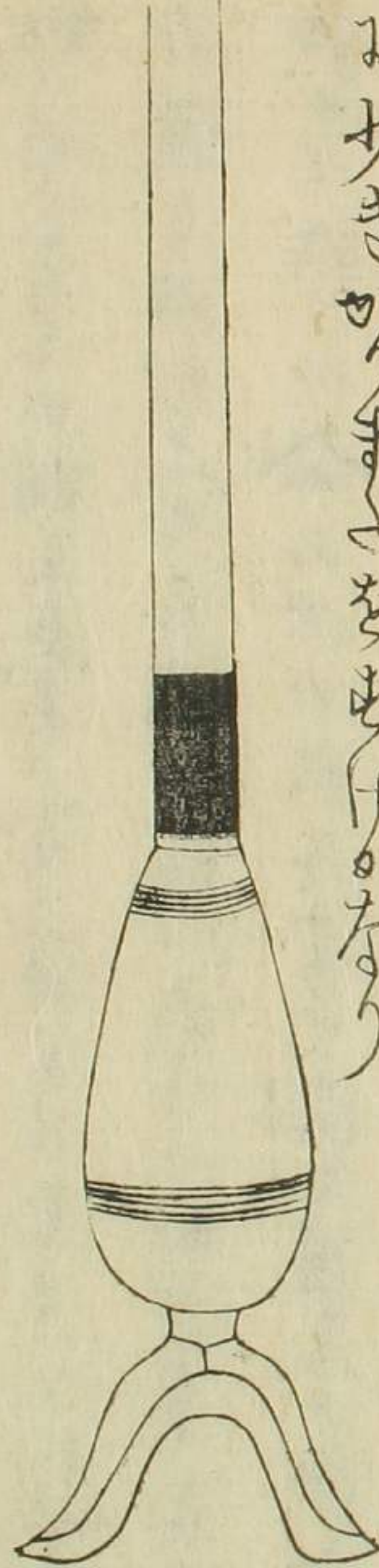
昔く羽矢の
 形は可なり
 今や可なり
 といへり
 といへり
 といへり

とうり八關東よりいふ家も又いふ家も浦づりとも田の
 水口ミナト居て小魚あど喰ふ事コイサヤ五位躰ゴイサヤの如く
 差矢サシヤと云ハ其を矢ヤ 羽ハの形カモの才サ二の羽ハを
 根の本より作日まきと云矢の如く此矢ハ三十三箇葉の
 通一矢あども用る近代之物古書には沙汰あり近代
 も有り出流流の弓の作匠の好む差矢の拵振サシヤも少く
 遠何と云

標矢クリヤの遠矢トラヤは用る矢之拵振矢同前略の才一の羽を
 以てまきと云根も木之尾又近代の物古ハ陣中より
 遠矢を射る今も古書にあり

くらと夫古書
 小ころり近代の
 物ハゆる手正流
 二葉百首流仲
 正の才ハ我意ハ
 ころりいあがす
 川のせまたちあ
 考のあまも
 右丈木抄見え
 くら
 先大曰くら夫ハ
 水の上は居る考を
 射よと云て
 なるの矢あり

標矢あど云物を拵置て用るふありす
 くらと夫古書に沙汰あり
 くらと夫の形を射る矢之拵矢クルリヤと書く木より志んどう
 の形のごとく作り軽く水は深く拵はまきと云其は
 小少きものまきと云げのたより



くらと夫の拵ハ墓目の如く用るは
 くらと夫の拵ハ墓目の如く用るは
 くらと夫の拵ハ墓目の如く用るは

太平記は藤房
 遺世の系は海人の
 面の羽付する
 平胡蘇乃巖
 世傳ふとあり

今いほき羽をくすくすと云い何をほりて

一 矢羽ふあゆのおもてと云羽何り真羽の袴（三）めは又

二 ぬは二品の鳥（三）めは書するハ信用しめ

四のつとくの羽と云あるべき事ともおもそれず（三）舞

の道をおむ人の云霧の面よあまのおもてと云ゆの

張を作りて（三）ぬはの形を書て面は用たあてえの羽

よあまのおもてと云おもあり此舞の面はぬとあり

名あつてとあり（三）あまのおもての面をとりま
 三十五丁よりるべし

一 矢の羽は霧の羽と云いふたりの羽の多しふたりのハ角

獲ると書く古、肅慎國よりふたりの羽を多く候し

きりとどけ國の羽跡よとれとも物とてはしうとれハ

ふたりの羽を肅慎の羽と云ふ肅慎と云國を上古

ハ鞞鞞國ともいひし

一 軍の時戦の初矢への痛えハ山を習鳥踏踏踏踏は五ッ

の羽を何と見ても同なる通例之踏踏踏踏と云ハ踏踏踏踏

食ふふと見ると云花あり（三）義経はもちむきの
 羽をいふともあり又ふたりの

羽ハハの字の形まをもちふたると云し

一 草麻圓物ハ一子神頭一子四目と射りし

一 野矢と云ハ征矢の事とあり征矢ハ軍陣を射る

矢ハ根ハ劍尻柳葉寺舌あを困之折矢ハ庶將

夫木抄に民形は
 有る多しゆれい
 冊之にさすそふ
 法のあつそふく
 一々あり
 参考保元物語
 九つさしたる
 行矣一腰三
 東鑑卷四云
 野箭一腰
 陸相野矢を鑑
 日とあり

日射る矢は是も征矢のこととあれも鹿相のころと入
 羽あるも何羽あるもあらずとせしむる野矢は狩の村
 射の矢あり故野矢と云野矢ハ鹿箭シハエヒラ一名ハ狩箭一名ハあやす矢也
 東鑑卷三十二云京兆被献野矢行勝等又同卷嘉禎
 四年二月七日將軍頼經公入洛行列之中次御乗替二人
 トアリテ其下ノ詔童野箭候御輿右童野箭候勝
 輿左又同卷十一のやトアリ又同卷二十二將軍御出
 隨兵候先陣六位十一人著水干負野矢負野矢在御輿前同卷二十七義
 村献御引出物其中御野矢とあり野矢ハ行列の時
 にも負ひ引出物も献せり同卷三十四仁治二年上

月四日為武藏野水田開發御方違渡涉干秋田城收義景
 鶴見別庄中宿老帶野矢若輩為征矢云〇征矢ハ
 逆頰サカツラ箭エヒラ墨塗箭クハヌリ盛野矢ハ狩箭カリ一名鹿エヒラ箭一名鹿ト云一名鹿小盛エヒラト云負
 一あり一ありエヒラ箭も野矢と征矢と差別あらずと又東
 鑑卷四十云前後供奉人皆着直垂帶弓箭而歲早
 以後入る皆負征矢四十未滿之輩常野矢あり
 一野矢の羽のなきやうに半小笠系兵庫助長秀記云
 所狩場の所供と騎馬六騎成へし出立水干行勝等
 皆をさすあり鹿相の羽籠を肩て上矢ハ四目
 をさす一羽ハ一羽もなきとありおのひは持つ也云々

羽のこりけきことい野矢のそぎやうをいふのまじりとい
 羽の端を折らましくせ生れのをましくして置くるをいふ征矢
 の羽ハ羽の端を折らましく又征矢ハ眞羽を奉るとす時矢ハ
 何羽をも用ゑ征矢ハこりけき法式あり高忠史云
ホノミヤミ時矢ハ
 法式無き野矢と征矢の区別也四目のこりけきありも
言ふ事ありあり四目
の羽ハ端を折らましく
こりけきといふ野矢のるを鹿矢とも云ひ折らましく
也
高我折矢
たぐ矢といふ日本紀敏達天皇紀は獵箭志やと
 よむ獵は射り矢の野矢の事あり
 八張弓と云ふの神代の四弓と云ふのを學びて定むる
 あり神代の四弓と云ハ大日靈尊の持るひし弓をいふ

弓と云タカシムスビノヒコト
アメノカニコ皇靈尊の天稚彦小孫弓を發向ふこと
 云ニキノヒコト
アマノカニ瓊弓時供奉の徳神の持るひし
 弓を護持弓と云ヒニホーデ
ヒノヒコト出見弓の持るひし弓を治世弓
 と云ヒニホーデ
ヒノヒコト日本紀皇紀古事記を
 云上古の神事ハ座陣弓護持弓治世弓あり云
 名ハ見えす後ハ名付る名ハ此神代の四弓の各名を學子
 して八張弓の名を作りしありクヒキフケ三後一統の首書檢
 の作法を記しる箇条ハ弓ハ太平弓ありしと云
 あり是を以て考れハ足利殿の法代ハ後もハ張弓の
 名ありしと云れし也世ハありしと云用さるる名ハ三後一統

の外ハ其時代の書ハ八張弓の名ハ見えず古本に於て
 篠ぬり弓 白木をば白木材と云ふ二所處有る事あり云
 名ハ見えずれども太平弓 シキキヤウ 蛇形弓 ラキヤウ 羅形弓 サライ 相位弓 サライ 四足弓
 陰陽弓 インヨウ 福形弓 フクザウ 世平弓 セハイ 小の八張の名ハ見えず又流儀ハ
 よりて八張弓の名も遠より本ハ小笠原家と定めし
 事ハそれよりして外の家ハとも少く其の數ハ
 名をも替へて其の流ハ此と流儀を云ふも其ありし
 小笠原家ハ是刺敵の比代も弓馬の比苗流といひし
 事ハ此の小笠原の流を本とすし又外ハ一張弓と云物ハ
 其の弓の形ハあらず リヤウトウ 兩派の地 ジヤ の形ハあらずと云外

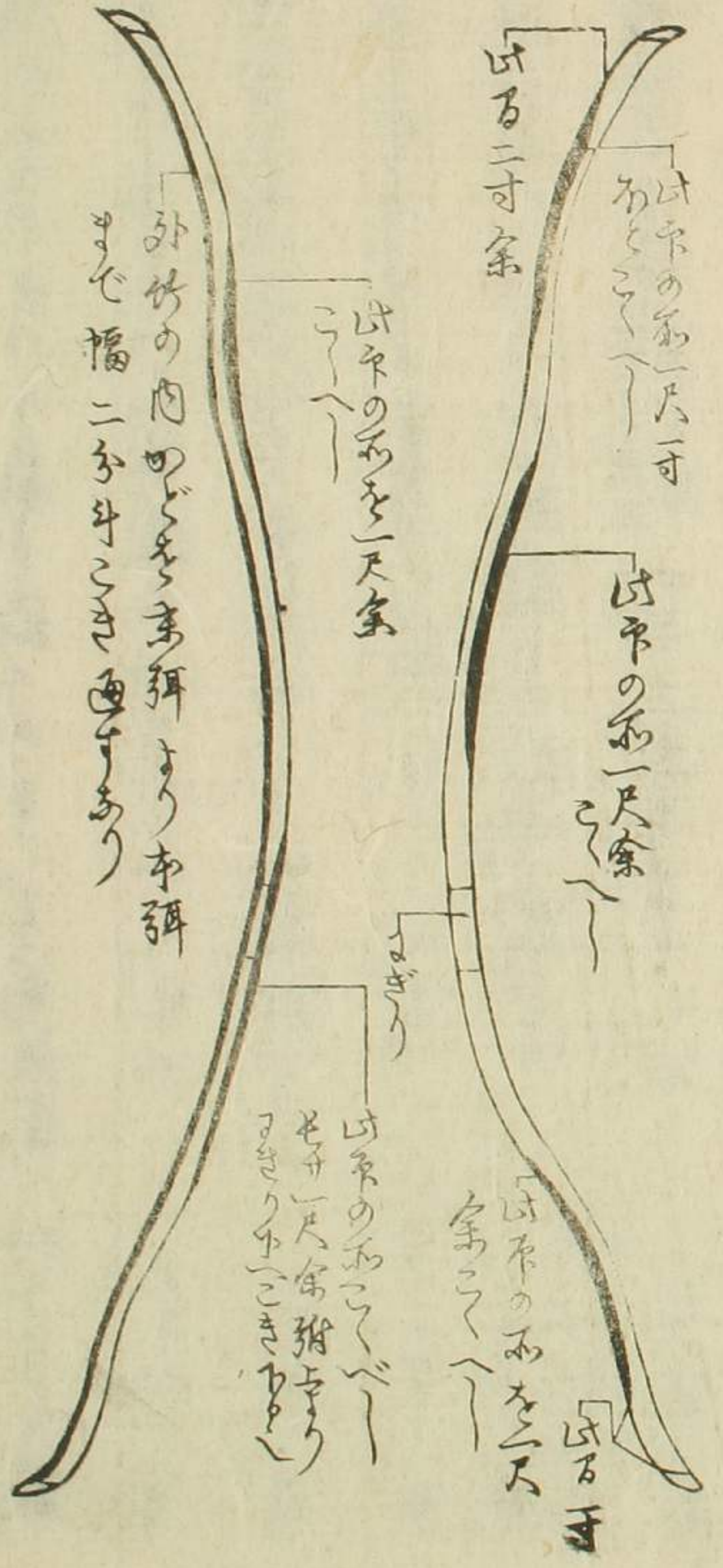
其の弓ハ似せる形を作し おぎりより上三十六兩處を本
 不動 ヨウ 弓 ウツラウ の三十六童子又三十六會 キ ありし事あり本廿
 八所處を本廿八宿と云ふ事あり又其は萬經の二十八宿 ホシ
 ありし事とも云説ありし事ありし物ハ用がしし外
 九張弓十張弓ありし事ありし物ありし物也
 古書ハ見えずる事の名とも其いふ事ありし後人の作
 事とて作し出しし物也

一 蓑目一腰といふ四ツの事ハ是ハ大追おの時の事古ハ
 四の腰と云して出する故に後ハ三の腰と云ふ事ありし
 事ありし物ハ蓑目一ツの本を一腰といふ人ありし物也

作りし一ツツと云へり一束と云ハ二十の束也一サニ上ハサ
 一其を白木の弓と云ハ弓馬故実又云舟を亦ハ又ハ其
 ちぬりて木を白くして置を云是も的弓と云武正の的の材
 持ハのま又馬上ハ持たざる上ハぬり弓を用る也
 一むらさきの弓と云ハむらさきハ村削と云 法量物ホウリヤモノ又云外ハうらまざるの
 際を通らへりみぎうの中と云すへより通す二ありて
 へり内ハうらまざる通しをトリアおより下通へりへり中を
 ねりてこきつてけそが本より又村こきましく本もず
 の際まてへり以上五ありて定へりへり弓馬故実又
 云相承なるへりぬり あつちへりぬりハ木の形をこき
 してぬれおのうらまざる也

一弓はこき種ありて こき種ハ 弓ハのりてわろく削り
 年々木は削る故むらさきと云是もぬり也

○弓村削る圖



歩まは七尺ハ
寸の寸を用馬
二寸ハ五寸ハ
寸ハ二寸ハ
寸ハ二寸ハ

一 ぬす弓と云ハ弓の弓馬故実なぬす弓は
つらぬ弓先ハ二面をみつら本之は外ハつらなぬとも
心正才よつらへ一一定法をへつら別をみつらても
上をぬすのむすもきくを白くも置つらなぬすのむ
つらぬ物と云く二面をみつらぬ二面
矢を射りぬすのむすの上
始と巻終の二面藤のつらぬをさくつらぬへつらぬのむ
事く是ハ騎射弓

一 白木の弓と云ハぬす弓も是も二面をみつらぬ馬故実
ハ白木の面つらぬぬすもきくも是ハ二面外の藤

一 弓の弓と云ハ弓の弓馬故実なぬす弓は

一 白木の弓はぬす弦つけぬす弓は白弦つけぬす弓

又馬上ハぬす弓を用 カチカチ 歩まハ白木を用ゆ 白弦

同上 村にきくぬすの製儀と云ぬすのむ古の定之旧記見へつら

一 重畳の弓ハ シメダウ 軍隊は用る弓之將軍家并大将の持弓

先重畳の弓ハ シメダウ 地のこつらぬ松傳あり シメダウ 秘傳と云ハ其

人の手へゆひける能き弓をきくひて小刀もたつら

竹の上皮をこそげ去るゆふの皮をこそ少けづりて弓は

きへへしゆをみつらぬむすめいなるハよもふなるゆ

少けづらへ一 上皮をこそげ去るゆふの皮をこそ少けづりて弓は

十匹は馬の毛
ごりりの皮をう
すく割りこ
らへるし刃の
その下地もす
ま

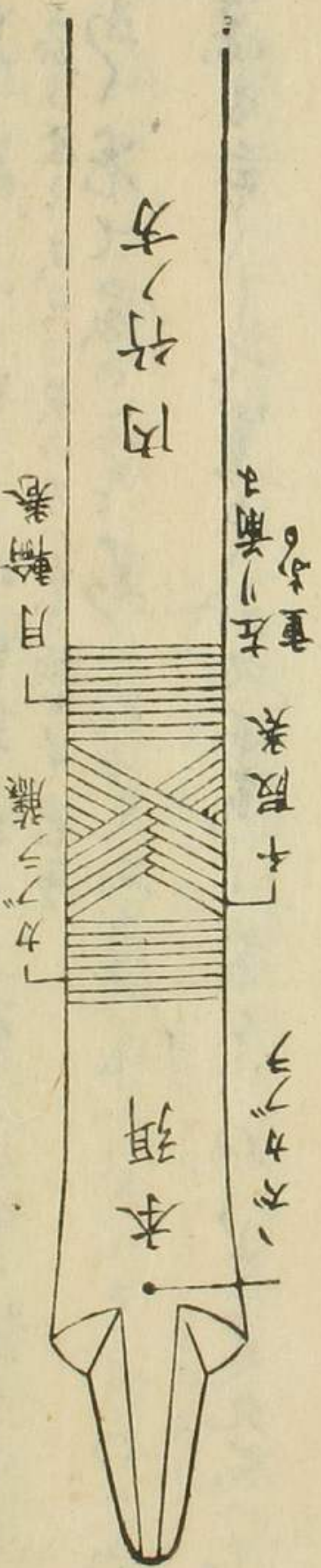
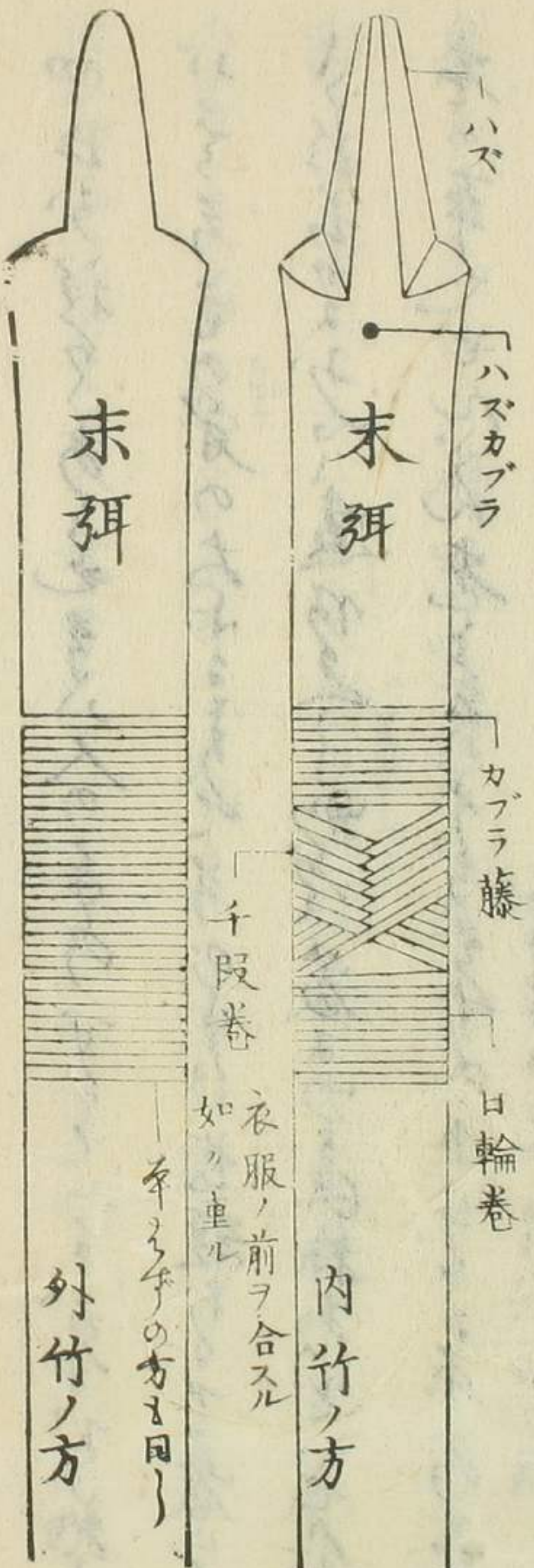
砥の粉地、リコ
地あるまほ
あむは
あむは
あむは

うも〜まある〜
木皮ふむぎらうも〜
と巻へ〜むきうも〜
を能おもせては〜
をう〜して後 緒糸〜
へ〜是もさひはの上はむぎらうも〜
巻く〜うも〜を能〜して後
又〜うも〜五人ぬ〜
へ〜うも〜は〜
きふ〜して 平あ〜
以上地のほ

口ろき雲き二三層海〜
埃のからぬ扱はね〜
らり〜を付て巻く〜
取〜も 時ある〜
赤糸も本あけ〜
おのやく〜
一重皮の皮の巻数の〜
上ハ皮敷三十六不あ〜
九巻又ハ七巻〜
六ハ地の三十六〜

或は梅檀ハ
つとせりあり
と云ふ云々
せんさんせい
のひききたり
と云ふ又云ふ
と云ふ又云ふ
と云ふ又云ふ
と云ふ又云ふ
と云ふ又云ふ
と云ふ又云ふ
の既用かよす

一のせんさんせいの千段巻と云ふは本字の梅檀巻と云ふは
 二のせんさんせい梅檀ハ本の名
 三のせんさんせいせんさんせいの十文字の巻をすゝん子の敷の
 十をすゝんでせんせいせんせいせんせいせんせいの十をすゝんでせんせいの千
 段巻と云ふ梅檀巻と云ふはその説あれどもむつと云ふ
 説は古代物なるを付くもむつと云ふ義理はあきらか



カブラ藤と云ハもづからのがたと云ふあり熱て物ノ根をくぐると
 云ふとずの根ある也(と)とずうありと云ふ○日輪巻は月輪巻と云ハ
 上の陽と日ハ陽に依り上の巻を日輪巻と云又下の陰と月ハ陰に
 依り下の巻を月輪巻と云只陽の巻陰の巻又上の巻下の巻あざ
 云へざるを名をまゆ妙はまへきあるは日輪月輪を以てあはざる
 者○日月の巻は付きこしかりき義理をむとむつハ却るありき
 義理のあやまきもむつハ説をよと云ふ○あつと云ふは梅狄の入
 る既ハ皆道代つくりと云ふ○久しうの巻はにぎりの上の巻と射り
 矢とにぎりの巻は矢と射りの巻と云○墓目たゞきの巻はにぎりの上
 の巻と墓ハ墓目大退相あざハ墓目と射りとはひきわりは沙おあは
 たるをにぎりの下をすゝん沙おあはをたゞきて後すゆひひきりたゞ
 と云ふ又墓目と射り人を射るをすゝんあはともあつて軍味のみみりも
 墓目すゝんと云ふ墓目と射り人を射るあはともあつて

又閑弦のさへ
見しうご枝目
日あつて

つくをかける
九本弓日新
ふた合せ
二サハ弓の
さうは強し

志あくるる六射あし〜
弓子一丈二寸の〜と云事物敷の敷はさる也
弓ハ一丈二寸の〜と云事見も物敷の敷はさる
はく弓のさるはさるをつめ付矢の端於ては折釘をさ
てそれ又矢をうけて射りかえつれせぬるるる物
之太平記の中にも〜かこよも軍中急用のるは小笠
原家八張弓の内はく弓あり福花弓と名付七軍隊は
用へき弓と〜し保元物語は城西八序る朝五人張の
弓七尺五寸を執らり〜
大塔宮二所及の弓根の執あくるるを十文字は振るる

盛衰記卷上十靜
憲寺入道問答ノ
系々上下ノ弭二
角入タル重藤人
持持タリケレト
リ弭ノ字ニツクカ
ナラ付タル誤ナル
ハシ弭ノ字ハトヨム
字ナリ根本ノ盛
衰記ニカナラ付タ
ル後人ノ所為ノ
假名ノ自遠アヤリ
多シ用元ニ足ラズ

同記は銀の執あくるる弓の普通は四五人より存せり
弓のさるの肩はさるけ〇又同書は銀のつくあくるる弓のさる
字あくるる帆板ホウカあくるる〜
をさくるるをさくるる又一説は弓の弭ハズのさるをさくるる云云源平
盛衰記は上下の弭ハズは角入れ〜
ららるる弭ハズは牙あくるる〜
折釘の事ハ何れは弭ハズのさる〜
太平記は銀のはく〜とあるの以家方とて近衛の官人の持の
弓のめく銀を以て〜とすおまをさる〜
非あり銀の執あくるる云云歩のまは心を付て〜

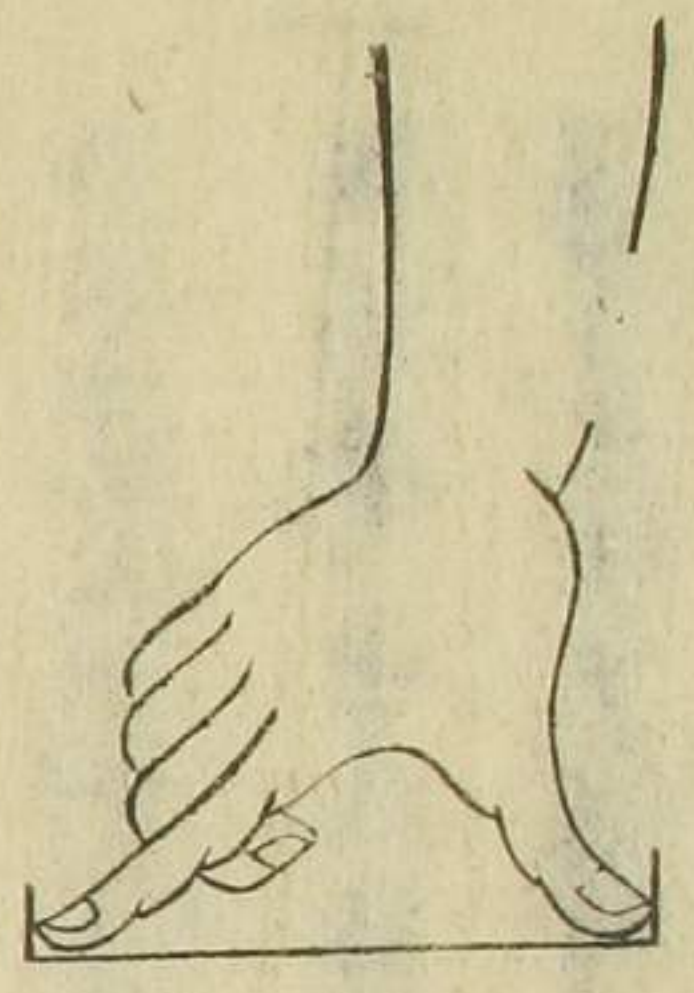
圓セキといふ所を作り出す弦を冥弦セキといふ取の巾といふ所を
 作り出す弦を板弦サカヅルといひしるす有りキタハタテノリトモ小田教具所の記一葉
 兼良公の尺素往来あまなうえあり是亦そ名相ありの
 一に下の名をとりて云く冥弦といふ所を作りし弦を白弦セキと
 ありし一にセキといふ弦も有りし一板弦といひしもそ名あり
 一にセキ弦のセキといふ詞のつらと板弦といふ下の名を
 以てのつらといふす弦をセキといふ詞のせくといふ心は弦の
 筋糸を考てひねりつりのゆるきを少せきし面を思はれし
 するらぬかう歌いよせぬうてる音をよせし心はこれのセキ樂
 弦と書し樂の字のつらと云く又圓弦とも書しし

かの冥と云ふ所より出の弦をいふ也

昔し一と云ふを
 をてつら板とて
 考てつら板とて
 板とすしこれに
 板とすしと云ふ
 一と云ふは板とす
 一と云ふは板とす
 一と云ふは板とす
 一と云ふは板とす

一 ぶぢぢと云ふの字と云ふ字跡を打ていしとけつらと云ふ
 して弦も切らず四角とておくをぶぢぢと云ふの字と云ふ
 ぬがと云ふの字も進物と云ふ物なり一名馬橋記云ふと云ふ
 の字もさしと云ふの如く懸の目も教はけ張も同かハ初は太
 内殿よりハ公方様一五十張進上しつる十張はと云ふと云ひ
 少く進上し列より一十張ハ何々ユビと云ひ
 一 弓の長サ七尺五寸と云ふ事京極大双紙と云ふ弓ハ裁しが
 多し七尺五寸と云ふ大ゆひと人さし指ユビをのび
 一 弓長サを五寸と定て尺をさしと云ふと云ふと云ひ

右の乳のわは本をもずをあてて丸の子をのけて其とどく
 られをかのみた
 げのまをさし



○つよくゆひをひくつぎ又なるゆすやうなる
 指をひくく
 ○大指へさしゆびをのげし大ゆびのうら
 よりへさし指のひきをむきし極く
 ○すしゆい人指ゆひをうらの中よりむきし
 一すしゆいし

常用抄に云々つもの弓やと最上の秘る之老若ともさ
 人のゆいし弓や七尺五寸又八十二束あり束法
 不知して尺定して七尺五寸と云ちうらふあゆみぬれ
 ごとく又云齒流弓のやどげのゆいし身の指をひて七尺
 五寸うらふ法にやう鞭と回し

一 弓のよぎうを定り射の方のまよふにばつものま

右の乳のわは本をもずをあてて丸の子をのけて其とどく
 右をもぎうてまゆをさしす尺不言と云を人より
 弓の長きうらふまよふべし

一 矢法の長廿の射子方ゆきま云矢法は廿の弓鞭を切
 る指のゆいしを丸の照より毛の長廿はくつべしゆきをさし
 出してとどけて其ゆより我子の六すと
 我子のすい人さし
 指の中よりゆきをさし

又大双紙を云熱して我らう子ゆい矢法は十二束本之
 又人よりして十四束も又十五束も其他十三束と八平生
 いまゆらうしうら一束ハ一まぎりまゆ指を横に四りさへたうし
 大ゆいハ除くし大ゆいハ向へまゆらうし

永仁布衣始祀云
 夫黒塗サハシト
 アリサハシト云ハノ
 コニニシテフシカ
 ケヲトリタルヲ云
 ナリ白篋ニフシ
 カケトリタルヲバ
 サハシトハ云ハズ
 只フシカケヲトリ
 タルト云ナリサワ
 シノ文字ハ曝ノ
 字ヲ正トス幸哉

一 矢一子とつら半ハお敷の類ニ記す

一 矢又さくらノ篋と云ハ拭篋トシテツラケを以テるを云

也 篋を赤うすりてありて黒うすりしツラケハサカサト云

今世のさくらノ篋ハ昔ハ赤きもの一名ナリが篋ト云

一 ことぐノ篋ハこつ火を焼てかざぐして色を付く

一 赤ウルニシテウヌクヌルナリ
 のごひ篋ハ赤ウ篋を云フ

一 一ノもろと云ハ竹のツラツてもろをノしたる也

一 よろずハはぎともろツセテ直ニ篋の赤ノ管を作

一 一ノ竹ノ赤きもの但ツツの赤トハセテよの赤ト云

一 法もともろハ羽の竹ト云テもろを作るともろト云ハ竹

一 まはれの赤ト云ハ作りのせもろト云ハ竹ト云

一 ぬりもろハ麻の角ト云テもろをせるとぬりもろハ麻の角ト云

一 とく赤の赤ト云ハ赤ト云 中古ヨリ節管ノ根ニ竹ノ皮ニ
 削リ残ヌヲヌタ管ト云

一 かしもろト云ハ管を篋ト云ハツツと篋の上ツツの管

一 括りもろを云ハれが管もろト云

一 赤ト云ハ赤の赤ト云の赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云

一 赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云

一 紙もろト云ハ赤の羽ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云

一 赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云

一 赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云ハ赤ト云

用書記云カバ
ギト云ハニニ
ハガナリ云

第一将として方極は用のきある故に糸を起しをより存
すの糸を用ふるのいふよし

一 かげをぎはきゆくの木のあまはうして巻く糸細おと記す

一 うねとぎと云ハ巾を白き片糸を巻いて上をうり
しをぬく

一 こゝろをぎと云ハ羽の端をうりそらぶして羽の生れ乃
まゝして用ふるを云ふ

一 婦らげをとりて糸の枝をたねおとすのくわ
ある糸を思へうりて糸をたねおとすはをほりみのきあ
す事ありうのくははきのことしてはつけて塗る

下地外は皮をのこす事あり

一 弓の藤をくちう敷くをさすといふ夏の巻く糸を
夏の糸は夏の巾を漆は小交の糸をちりまてて
於年と夏の巾をけぬるは此の事

一 糸のまぎと云ハ糸のまぎを巻くといふ夏の羽の
上のくきを巻くは夏の羽の中れくきを巻くは夏の
ハ箕の糸の方をまぐといふ夏の糸の中の方を
巻くは夏の糸の中の方を巻くは夏の糸の中の方を
の糸のまぎと云ハ糸のまぎを巻くといふ夏の羽の
ハかゝのことと巻く

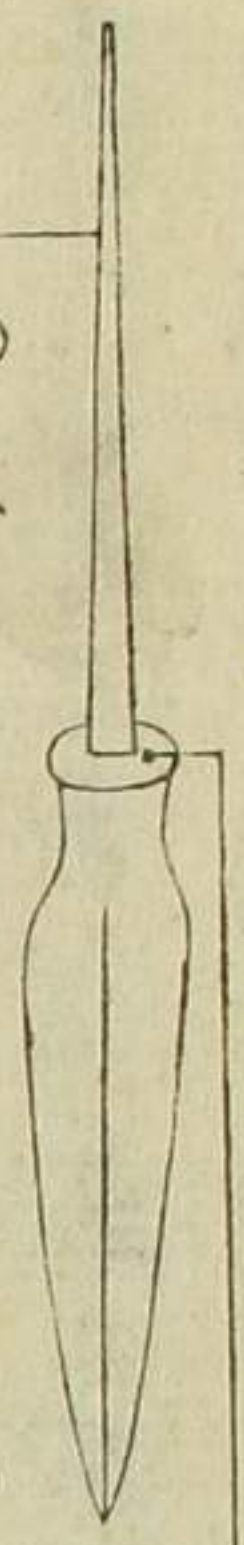
雑記十

廿日

太平記卷三笠
置軍の多あり十
三束三つがせ籠
つきの上を七寸
のけあむしり
めちやうととも
つとち

一のさうのびりかたにのしめいけんさうのびりかたの

一の根のさうのびりかたのさうのびりかたの



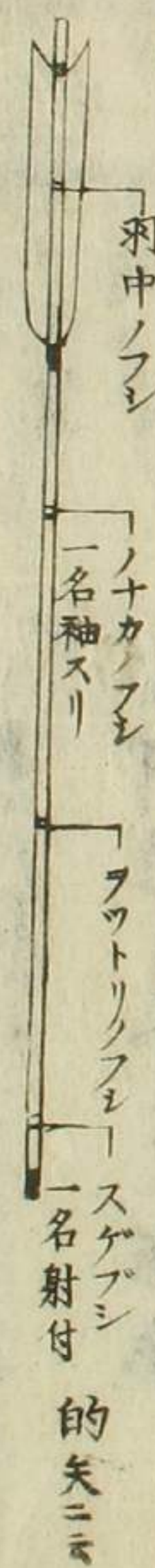
「あこののびりかたのさうのびりかた」

「けあむしりのさうのびりかた」
又「さうのびりかた」

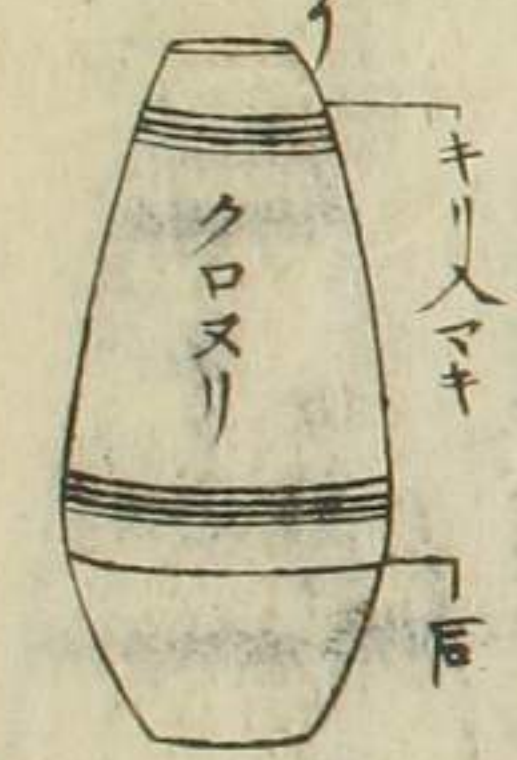
保元お経は山名尾を以て作し、七寸五分の丸根
の筒申過て筒代何あをさく

一のさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの

外のあのかたのさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの
一のさうのびりかたのさうのびりかたの



一の根品の乃図



雑記十

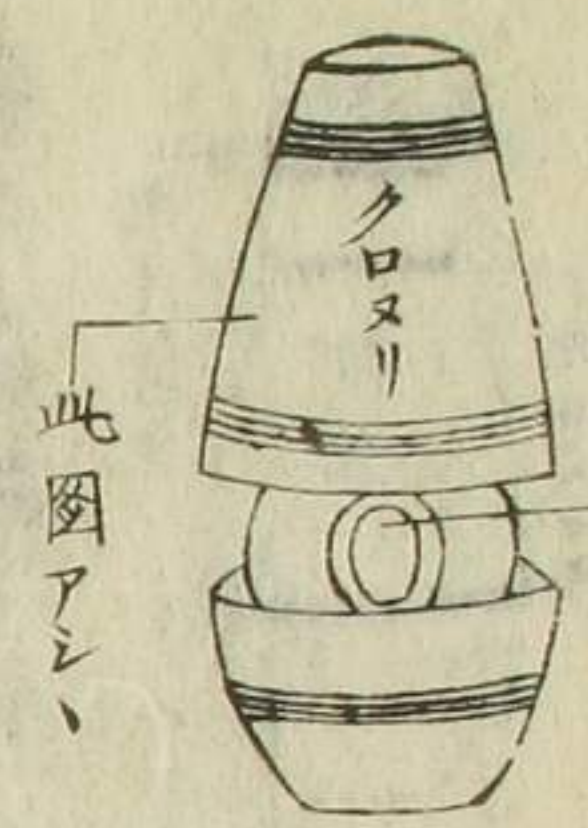
廿五

世三用シハミ系ノ
形之違タレモアリ又
諸流ニテ今ハ違リ
古風ハ此ノ如シ

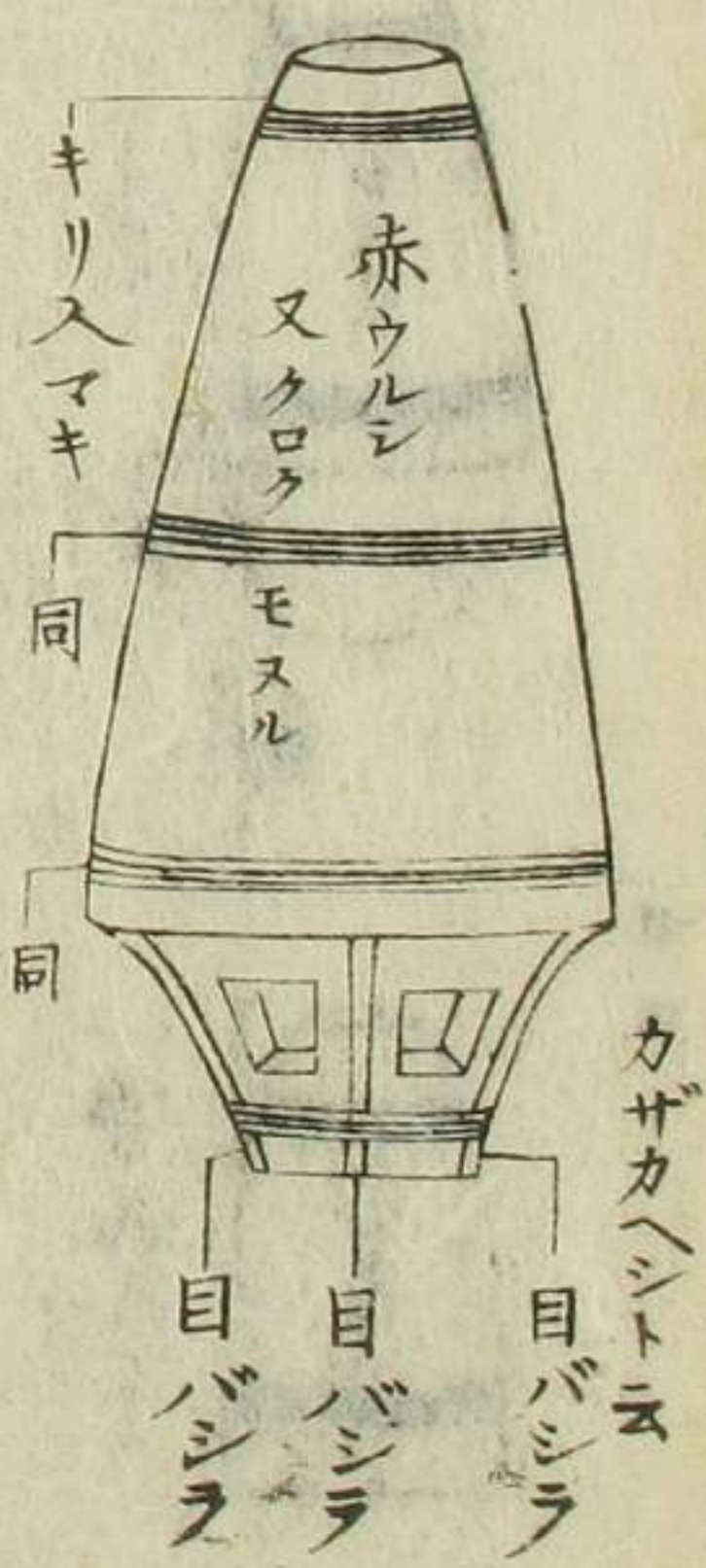
木棒ト云フ故木
ニテ作ルが本々
クニ思ルレトモ木
八尺ナリ

木ワリノ事義経
記ニ見ナリ聖
木イ千井ノ木ナド
ニテ廻リ四寸長六
寸斗ニ拵テ強弓
ノ射子具ヲ以テ
松^バ楯板ナトヲ
射割ルモ故木割
ト云ナリ

自四开又ある

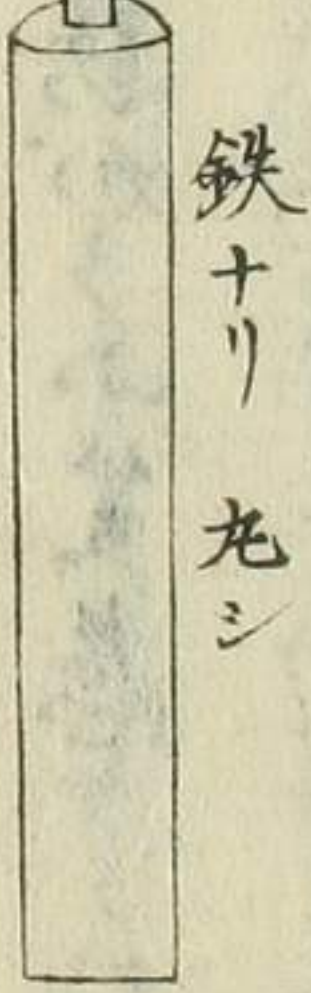


キリ入マキト云ハ切クホメテ
未ニテマクナリ



右何せも本ヲ作成

まがらりの器

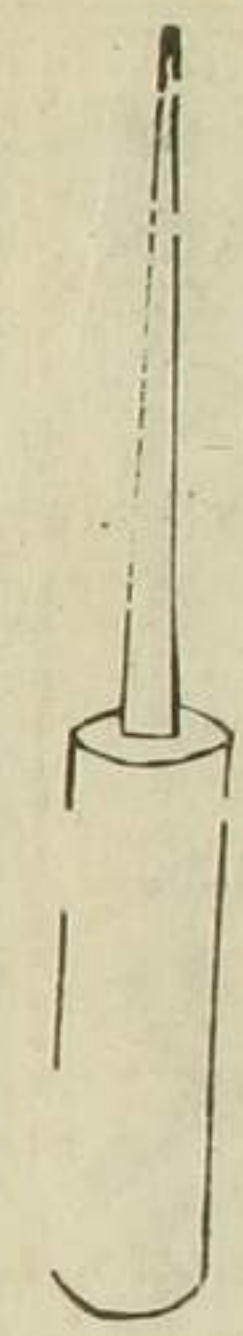


先ハ平ナリ長廻ハ
弓ノカニヨルヘシ又フ
トサ弓ニヨルヘシ

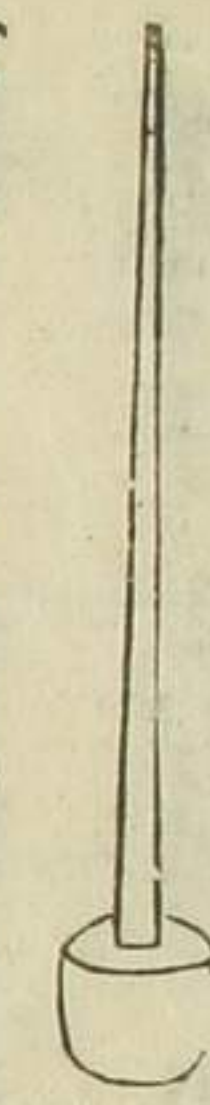
武説はまがらうの木ヲ作るは木棒と書ト云ハあやうし
をあるとも作るとも亦ハ誤アリ
まがらうの木棒と書へ木の棒のめくお出此名付し
誤して作るとせんとうあどの代りハ射あし 本棒と書ハ

應仁記曰神保宮吉隆射安富民部ヲ許へ使志を遂
今朝矢負^{ヤオヒ}の丈河^バあり最矢て最速^キバ木棒^{キバウ}を
かり合カハへちマケ云々きをうハ木の棒のめく丸くして
きまきを平ニ切らてて甲胃あるよ透らハ透らぬ
ある場つう志を敵を射倒^シすは作らぬ
の木棒を略しして
注のぎと云ハ角のきいりふと云事ノ角もんきまを
昔^ヨのさう 今^{イマ}のあそバ竹を割りて角の中へさしこみ
筑^{ツク}はしつう今^{イマ}のさうきまをつのぎと云ハ木
ころの形もゆるりたる大小のちひあぶり木よりハ

大くして堅木を作る

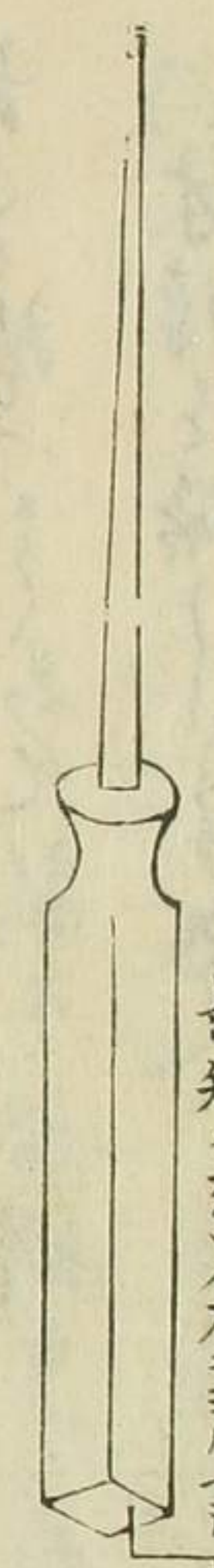


すきこらうきり形
片のぎとハ別あり



吉部秘訓ト云書ニ見
的久ノ平題此形ナル物ナリ

むやう柄も珍まを修る是も神改あとの代り用



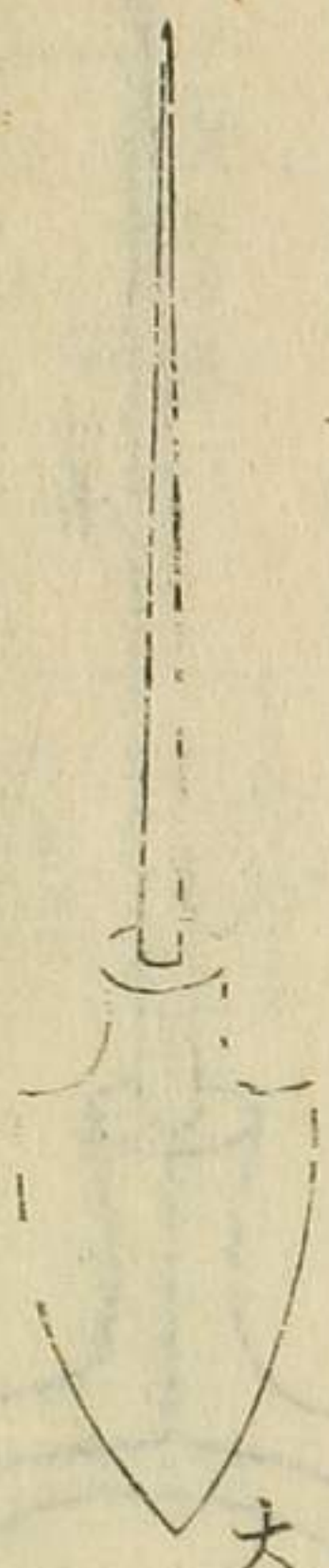
長短ハ多ノカニヨルベシ
サキモ四角ニテタイラシ

むやうの

ぢやうのくハ定直と書是も珍まし四角は作り之四角神改
あとの代り神改はきりやうの形

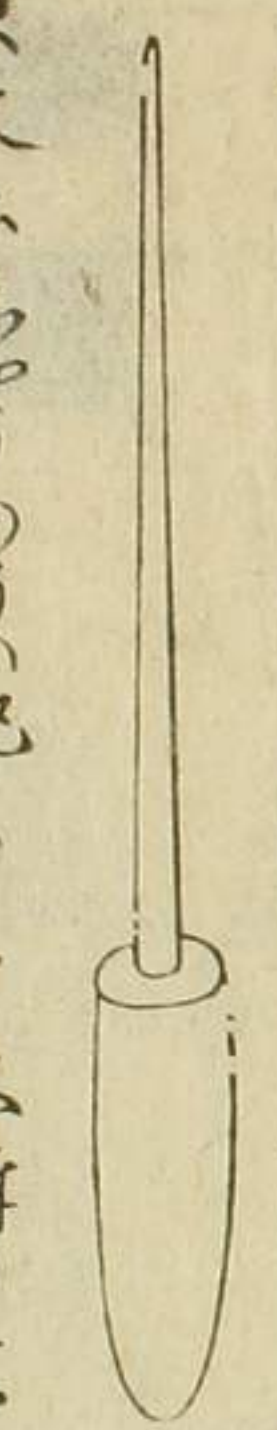
一書れ新ハツるま小者なこしぎをを母も二十も又十も
さすへー 志のあざしさーとさすべー帰陣ハ志んさ
さすすまーさきりぢやうのうあハさすさきりとあり

ぢやうのうと云ハ志やうの尾と云平本之泥鰯の尾と云
也と辨録圖彙は見りり珍も有る在り記也
ゴラボウツイ



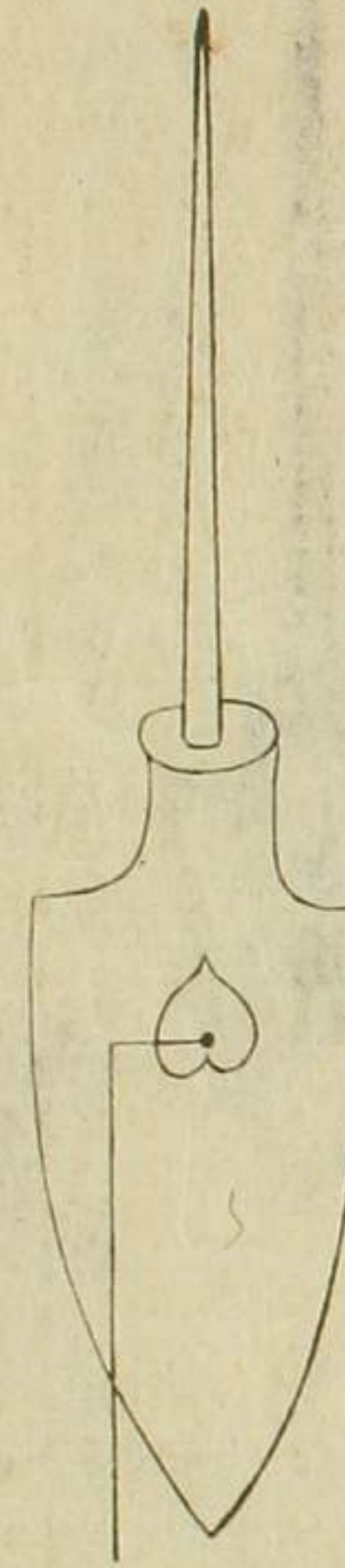
大小あり

ヒラ子
平根



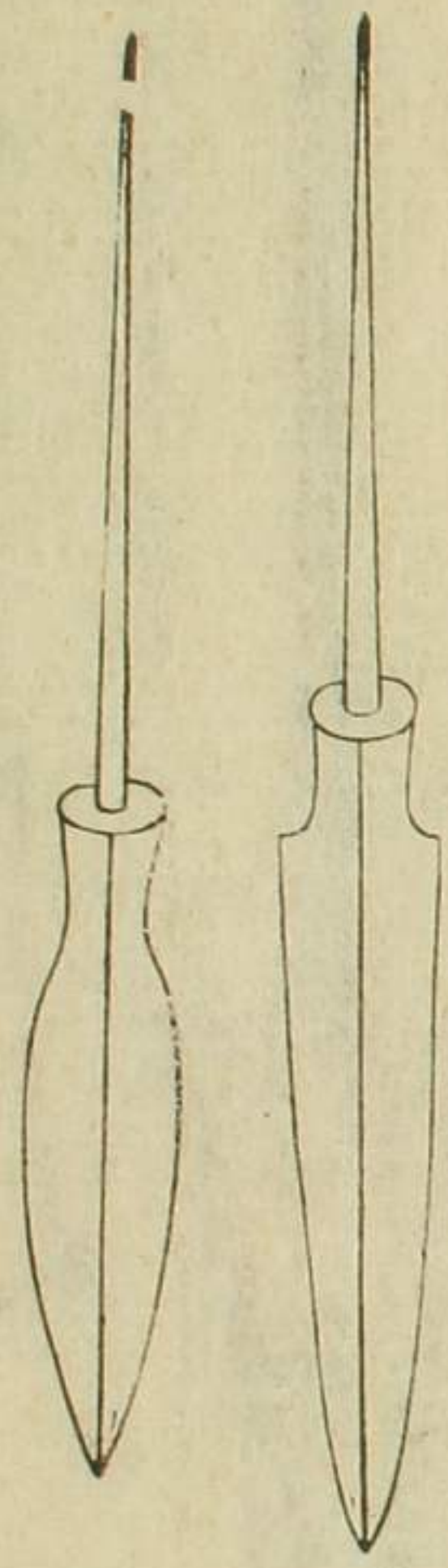
志やうのう

真丈云志やうのうハ丸くして本柄の形ハ平きお
りありハ丸のありありハ丸のありあり



ヒラ子
平根

こくに柄の花をさすくハ
あり越前のはつらハ柄と云

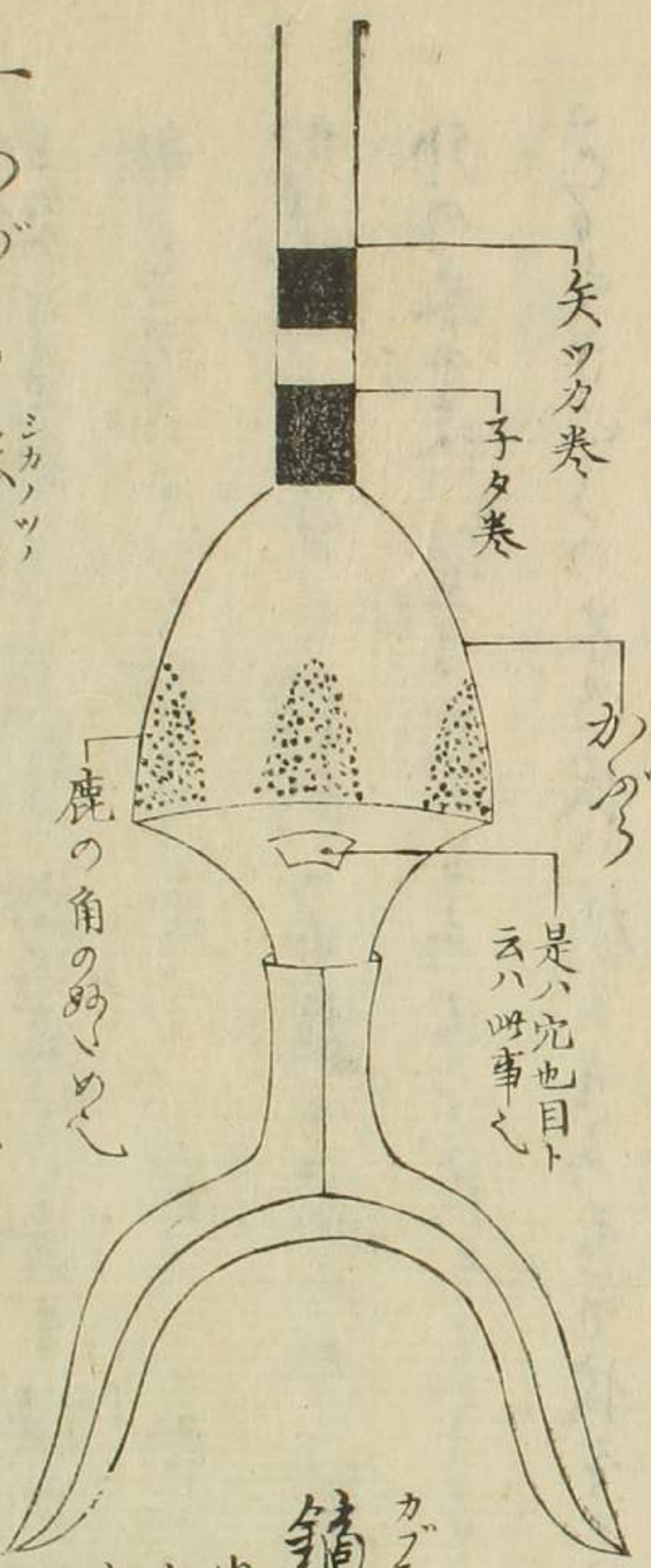


志やうの葉

志やうの葉

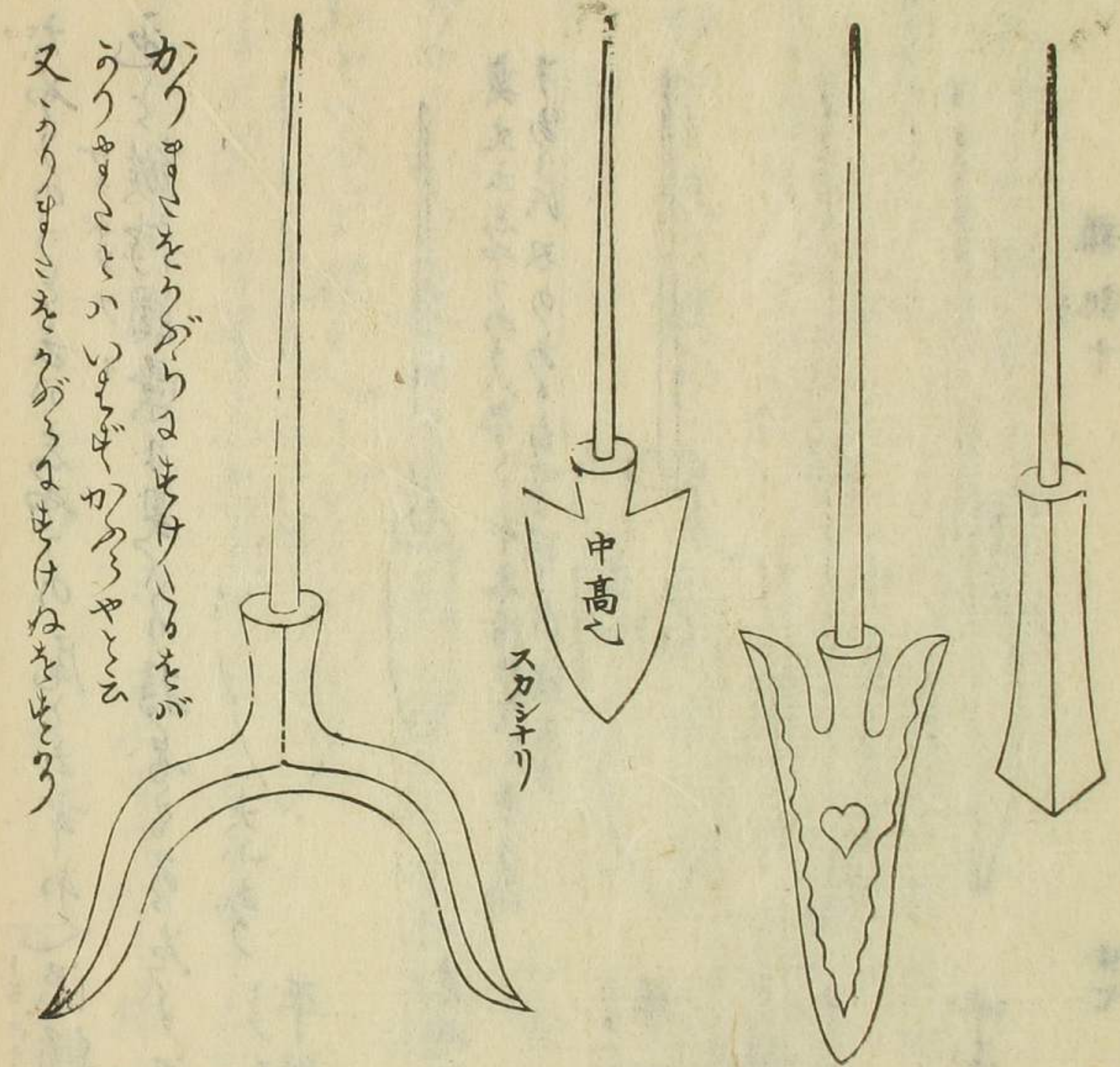
夫抄民記
 のうがら
 一

一 かがらハ鹿角也又あめの根も作れ其の目を
 三方よりかぎ流鏑馬から射るはうりまをせける
 うりまを射る
 朴の木のかげ
 一 名は他も矢もはねまよりそまの志うい羽の定り其の



鏑矢
 カブラマ
 ぬいめのめい
 うりまを射る
 一

やういすかりやういすかりやういすかりやういすかり
 射るやういすかりやういすかりやういすかりやういすかり
 一



かりまをうがら
 うりまをうがら
 又かりまをうがら

雁股
 カリマタ

トガリ矢

腸繰
 インタリ

劔尻
 ケンジリ
 けんじり
 云うやう

念ノ物トハ執念
ヲカケテ必射ル
ニ思フ也

又おひちやの時ハおつらりのやをさうへうがの時の時ハつら
ハつらやよさす
そやのまじもけづを扱ゆる馬が実ハ見へたり

うらぶよえのさう枝の園ハ書札雜々聞書ハ何り

志びろよえのさう枝の園ハ将何記ハ何り

すちを太城ハひきうらると云祠あり村子の祠ハ目置流射的

書ノ歌ハ念のむのまちをこがひ引のけて他念ふキこて

あつらやせんあり此方の心ヲ構を四的を我おもあし

ちをこがひ引のけて他念あり構ハひきうらると射ハあつらりの

そへともあつらりの参考保元物語ハ徳西八郎為朝のえ

ハ争を記ハたるあつらりの根ハ楯破魯舌もあつらりの

いこもそのをさきやをよ厚さ五分廣さ一寸長さ五分

いこせすちをさきやをよ厚さ五分廣さ一寸長さ五分

本の方えのの切口を云々園本記ハのをさきやをよ厚さ五分廣さ一寸長さ五分

さくと見へりのをさきやをよ厚さ五分廣さ一寸長さ五分

縁侍ハすちと云字ハ禪の字を用さるあやまり成へり

の根を待てる心ハすちと云成へり待の字を用へり

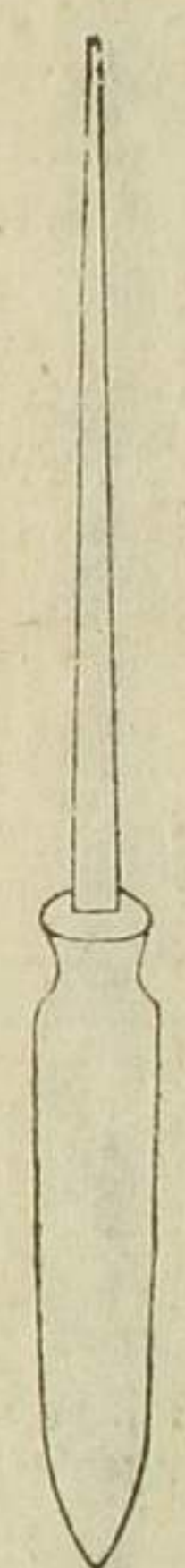
一丸根と云矢ぶりの模の葉のこころして中ハ志のきをさ

せして少丸を付るカイシノギのぬり細川玄有馬守者

云丸根ハ今人のヤウシカタトヤ根と見ハ伊勢守者記云

根ハ丸根或ハヤウシ形ナド云射具是秘傳云征久の根ハ

丸根奉之家中竹馬記云ウツホニ久サスハ征矢ヲサス拭首比
ハ略俊之根ハ丸根揚枝形之劔尾モ宮徳ニサスニ不苦云



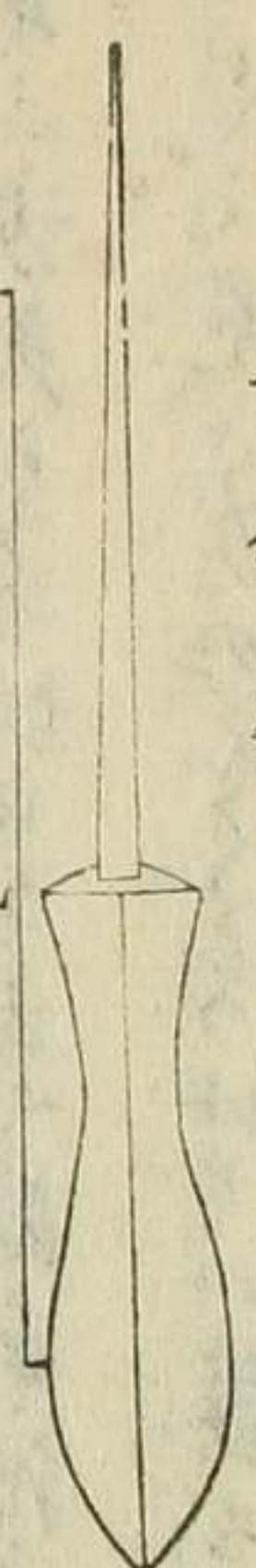
丸根

鳥の舌と云根も柳葉のこころの舌の形之中ふ志のき
きこころ、柳葉の形之丸根よりハ平きあり



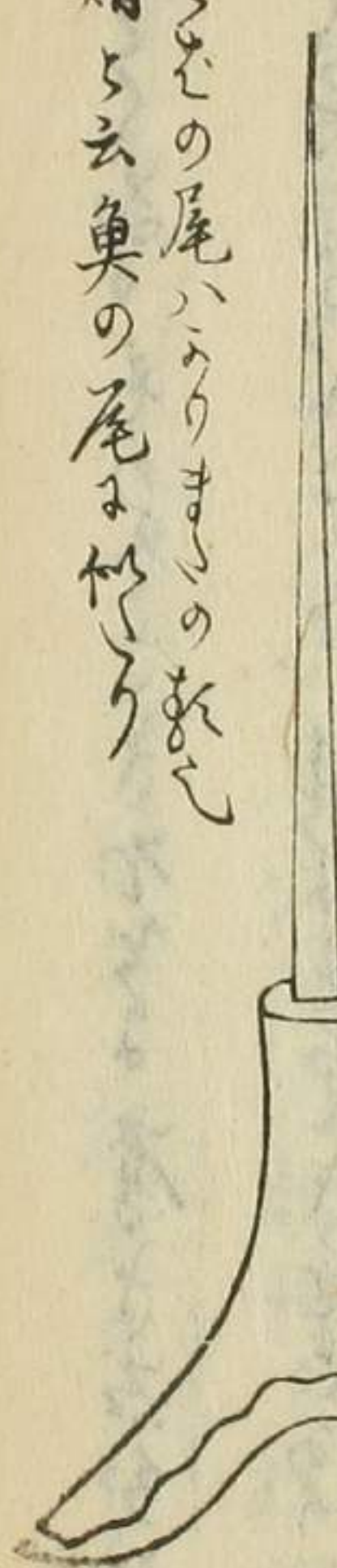
鳥の舌

小ク細ク厚シ



蠅の尾

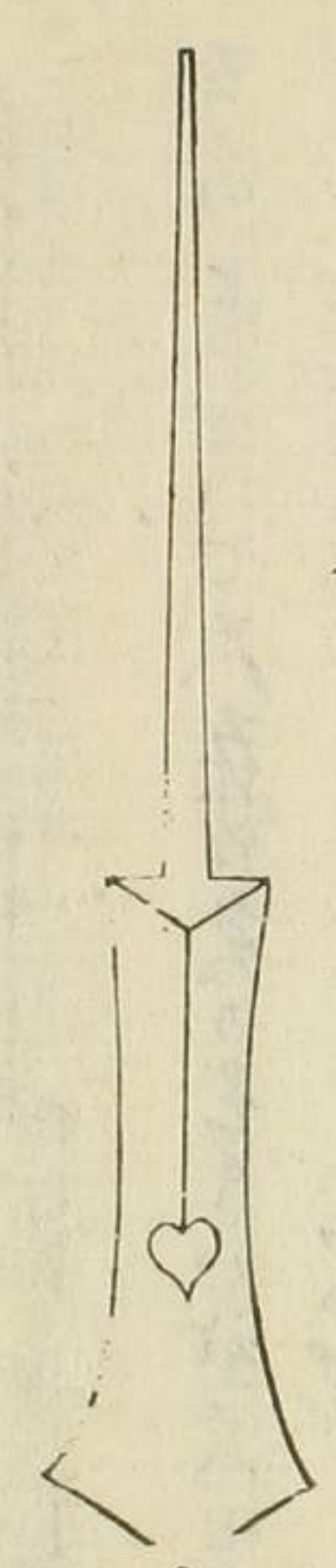
肉ヲキ厚キモノハ
ハイソシリノ如シ



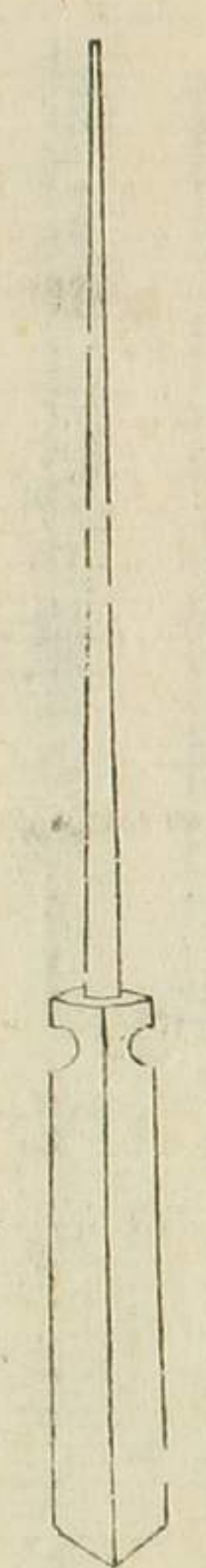
鯖の尾

子と云の尾ハハコリまの如し
鯖と云魚の尾ハ竹ノ如し

キと云りのハ劔尾の類

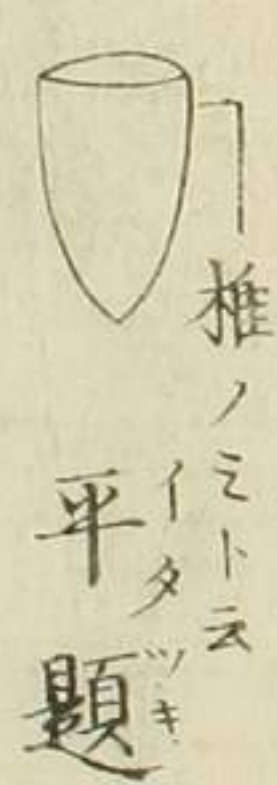


楯破



劔尾 本名 劔鋒

つとつとニ品あり



平題

延喜式は延喜年中禁裏の角の大い、はき角の細い、

はき木の大い、つとつと、上右延喜の形ハ今の様

ころ久のころ、角又ハ木ヲ作り、

弓ノ末々ハ本名ハ葎藤とつと、葎藤とつと、草の葎

の皮あり、是を葎と云あり

夫木抄六帖題
儉實羽臣々々ハ
こふゆ、ちのゐ
ての、ゆ、す、も
す、の、つ、つ、き
こ、つ、あ、は、な、り
ま、す、の、つ、つ、つ
き、ハ、湯、ま、て、作、ら
り、つ、き、あ、り、
鈴、の、ま、ま、と、
る、あ、り、候、あ、り

其和をよきう草の和と定むる者古代の弓矢の寸法を
 今これを知らぬ人のしりうの寸を以て定むる事と心持
 をあやまりて人の寸を以て定むる事と定むる事と心持
 大小は限る事矢の尺も長短ある事と定むる事と心持
 の今の世も人の寸法も同じく定むる事と定むる事と心持
 古その寸法の大小同じく定むる事と定むる事と心持
 書を以て律代抄とて書する事と定むる事と心持
 人代及てこれを定むる事と定むる事と心持
 ともいふはさるる事と定むる事と定むる事と心持
 用ふる事と定むる事と定むる事と定むる事と心持

弓矢の寸尺長キヲ
 用テテテ武具ノ部ニ
 記シテ人々ニ示ス

夫木抄西行法師也
 の寸法を以て定むる事
 と定むる事と心持
 我身産小を以て定むる
 事と定むる事と心持
 の寸法を以て定むる事
 と定むる事と心持

世を定むる事と定むる事と定むる事と定むる事と心持
 ある人も少き人もその寸法の指の寸法を用ふる事と定むる事と心持
 大小相應する事と定むる事と定むる事と定むる事と心持
 寸法もあつて心持我子の寸法を定むる事と定むる事と心持
 人の好む事と定むる事と定むる事と定むる事と心持
 一 僕野矢と云名本鑑に見えり雁侯の矢の事と定むる事と心持
 こ云世世の寸法を定むる事と定むる事と定むる事と心持
 小弓と云わハ武器ヲ用ふる事と定むる事と定むる事と心持
 何と云わハ延長五年四月内裏と云小弓此勝負あり
 中古今著聞集より養久二年五月廿日鎌倉大官全禪

或説ニ云クマハスヤ也
 フトス五音通ススヤト云
 ハスガノ畧語也カリ
 マトカリマナドニ對シ
 テスガナル矣ナル故ス
 マト云スヤ 詞轉シテ
 マト云也云々貞丈云
 此説甚ヨシソレヲ
 説ヨリマサレリ

門の亭と小弓の舎あり〜中東濫はあり云惠法平ら
 庭訓從來は揚弓者小弓と何ぞ有らうと云はしむる程を
 多をくく置たり置て小き弓矢とて射てあてし程の者を
 とるたるむれは近世古田舎はあり〜と云

征矢ハ軍陳の矢之敵を征罰する矢あり故征矢と書く
 是ハ指も知る〜征矢と書くを也〜ハ知人
 あり貞丈按も亦とやと云名ハ〜び〜矢と云を畧〜と云
 いて云あ〜〜とび〜ハ背の半之征矢をハ腋〜と背
 負ハたれ〜日本紀神代卷ハ大日靈尊の背ハ
 千葉の鞆と五百葉の鞆を負ひき滿ひ〜と云

光大征罰矢ノ故
 征矢ト書ト云フ説モヨ
 ロシクハ又一説アリ
 鷹ノ羽ニキタタラ
 征矢ト云也其故ハ鷹
 ノ事ヲ征鳥ト云ハ也
 征矢ト書テマト云ム
 前ノ説ノ如シ

鞆ハ腋の鞆之神代より征矢をハ背負る物之背矢と書く
 ともやと云む〜とび〜やを畧〜と云と云〜又背
 矢と書くせやと云む〜と云通事ハ〜と云
 とも前と同意あり



鞆ハ近年袋を伴てそれをもせず加ひ〜と云人あり誤
 弓のちずは袋を伴て古書〜と云〜
 かむ〜と云ハ根の半之弦も弦幅の根のちずはを弦
 うむ〜と云〜

雜記十

廿四
 廿六

小管草コハズカハの草コハズカハより久百回答百回答云云 小管草コハズカハより

廣コハズカハ四寸長コハズカハ一寸五分コハズカハ一方ハ蛇の頭の如コハズカハ一方ハ尾の如コハズカハ

先の方を五分コハズカハ横折コハズカハて中コハズカハ挿コハズカハ入コハズカハせコハズカハて尾コハズカハをハ管コハズカハの方コハズカハへコハズカハひコハズカハくコハズカハ

糸コハズカハを結コハズカハたコハズカハらコハズカハを引コハズカハバ蛇の頭コハズカハの物コハズカハは向コハズカハらコハズカハめコハズカハくコハズカハらコハズカハの本形コハズカハハ

蛇コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ悪コハズカハ魔コハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハとコハズカハされコハズカハバ管コハズカハ皮コハズカハをコハズカハたコハズカハたコハズカハをコハズカハぬコハズカハらコハズカハせコハズカハハ

大事コハズカハの物コハズカハを不可コハズカハ射コハズカハ管コハズカハ皮コハズカハの皮コハズカハハ赤コハズカハ皮コハズカハと赤コハズカハ皮コハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハ

小管草コハズカハの図コハズカハ  或ハ赤コハズカハの皮コハズカハの頭コハズカハハ眼コハズカハ鼻コハズカハの飛コハズカハ

をコハズカハ引コハズカハけコハズカハ蛇コハズカハの如コハズカハくコハズカハまコハズカハくコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

をコハズカハ引コハズカハけコハズカハ蛇コハズカハの如コハズカハくコハズカハまコハズカハくコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ


草コハズカハと云コハズカハ物コハズカハ上コハズカハ占コハズカハハ云コハズカハ物コハズカハ之コハズカハ中コハズカハ挿コハズカハ入コハズカハせコハズカハて尾コハズカハをハ管コハズカハの方コハズカハへコハズカハひコハズカハくコハズカハ

置コハズカハるコハズカハ物コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

物コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

一コハズカハ之コハズカハの羽コハズカハハ白コハズカハくコハズカハくコハズカハまコハズカハくコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

物コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

箭コハズカハの亦コハズカハ也コハズカハ 

記コハズカハ之コハズカハ見コハズカハるコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

羽コハズカハをコハズカハ白コハズカハくコハズカハくコハズカハまコハズカハくコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

ひコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

云コハズカハ物コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

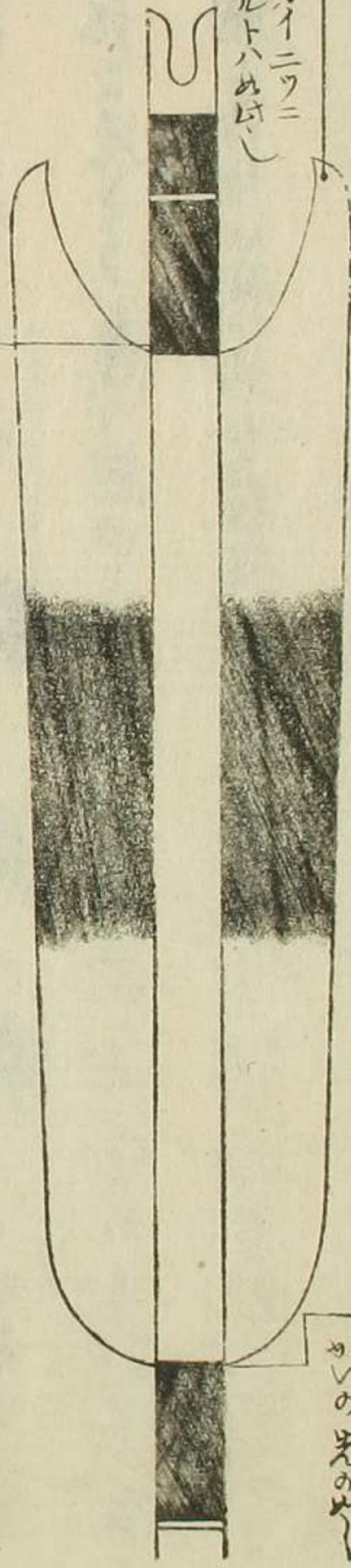
云コハズカハ物コハズカハ之コハズカハをコハズカハとコハズカハんコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

白コハズカハくコハズカハくコハズカハまコハズカハくコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハとコハズカハ思コハズカハふコハズカハらコハズカハ

矢の羽子羽と云る何れも正羽の間にあり上の方をさ
なり言忠少書のお名にのこす

羽のあり方ういへんをさすはさういふはさういふはさういふはさういふ

カウカイニワニ
ワリタレトハぬけ

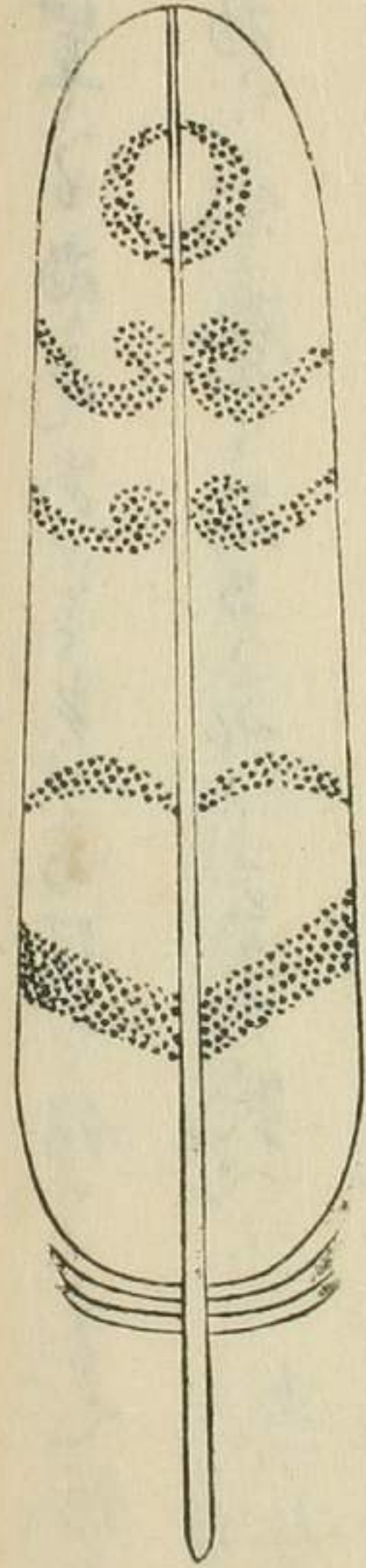


新にきくの羽
はさきの羽
あいの先のあし

式通りより上の方を羽と云羽より下の方を針
おとすはさきかほうをさすはさきの外へぬきかほう

一 あゆのおゆと云羽の圖

しよある書よええうう正あはりさるし



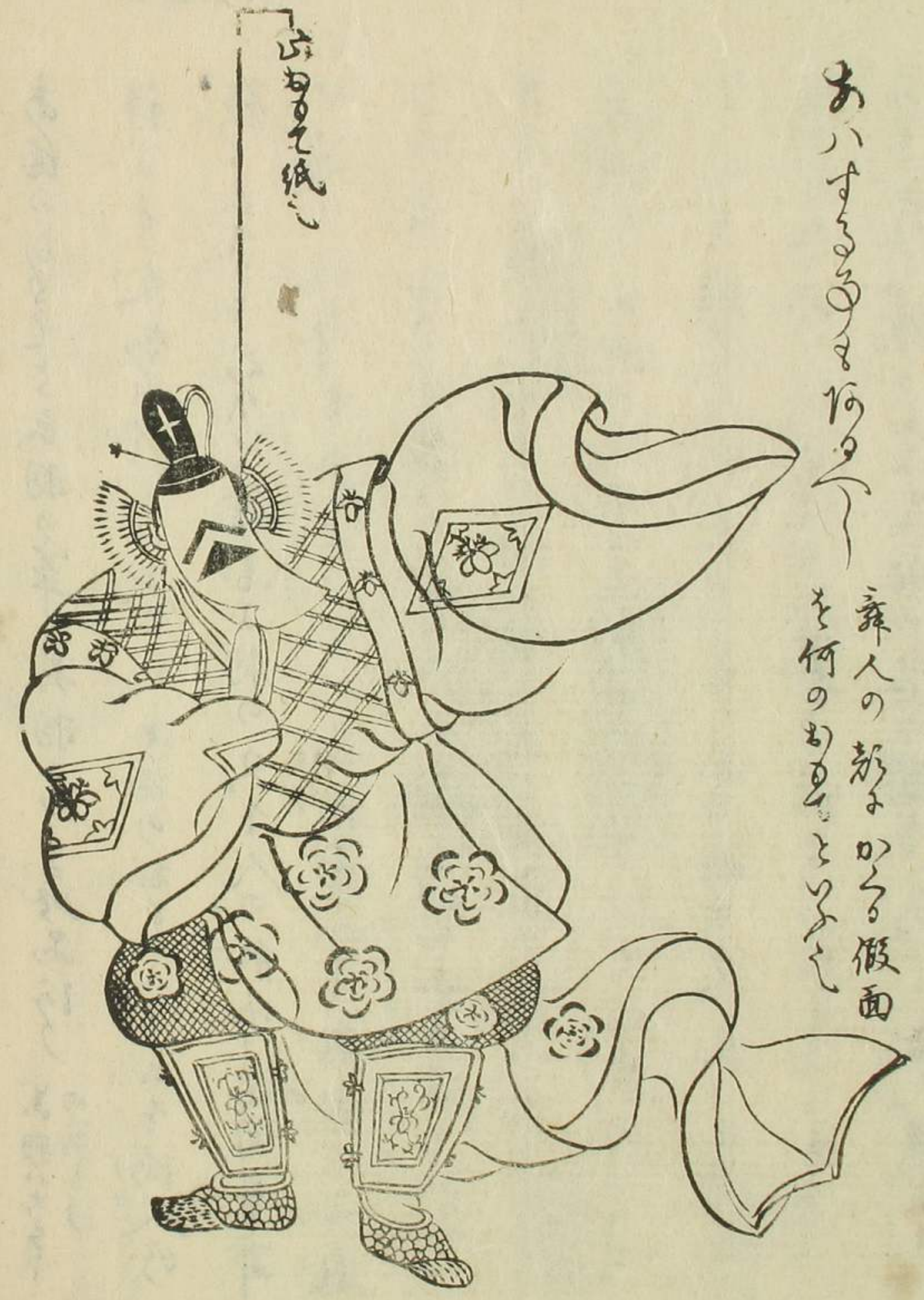
追記は圖より
不可用は
まはりう可見

光大曰ある人云
といふ山岡澄明
の說に其書四
季子あり和
學に名をとりし人

あゆのおゆと云羽の事真羽の中まはり
詳よま文初ればあゆ人の云あゆのおゆと云を漁人の
類と云るといひて繪も羽の文を人の形と目鼻耳
口頰の形を畫もこのい妻作あまの**音**樂安麻
と云と或はありま舞の面紙也 ▲此の形を畫を
まて舞あまの面の羽と云安麻の舞の面のごとく
ゆきへん思もまて此のごとくあまの文はあまのま
けもあまの羽の說も推量の説といひあまのまけ
りき考へ依るま安麻の舞の圖をうへまはる後

おひ

あはすゝものゝ何とて
舞人の顔の如く假面
を何のおもひとて



真丈按さるゝ海人^{アミ}と云ハ魚をとる^{アサ}年を^{アサ}紫とす^{アサ}者之海人

の顔も外の業をさる^{アサ}者の顔々耳鼻口遠ある^{アサ}あり目

面^{オモテ}とされバ羽の文^{アサ}あまの面^{アサ}といふ海人の面^{アサ}といふ

あまの安麻の家の面^{アサ}といふ^{アサ}粒あり面^{アサ}といふ假面^{アサ}の多也

一 八文字文

ハキクマ クマタカ

文カたく上リ
カタク下ル
地白ク文ウス
子グミ

一 あまのおゆし

地白文ウス子ツミ色

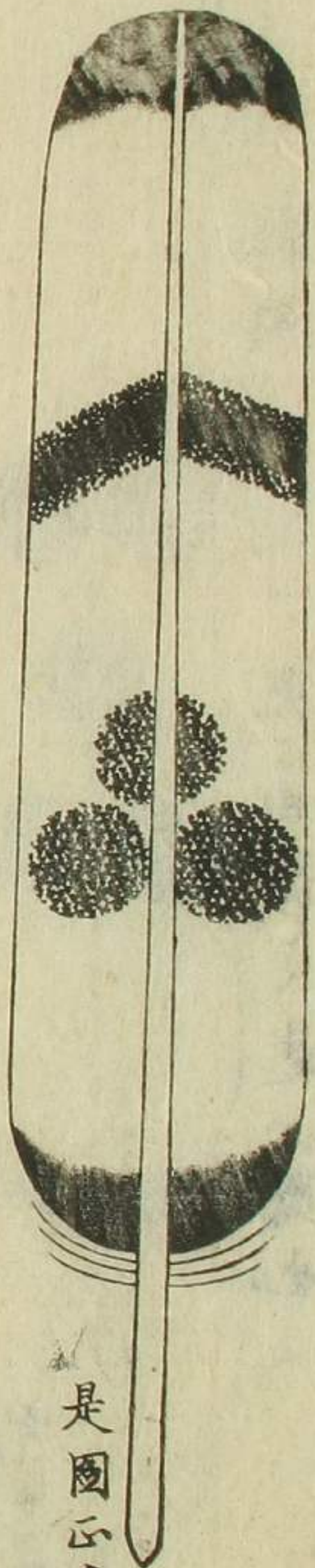
コレハ松前ノ人
エゾノ行テ取来
ル前々ヨリアア
面ト申シ習シ



嵯川親興此ノ羽ヲ見シ由談々是正圖也

雜記十

卅七



是圖正真也

一 此圖ハ天文元年三月小笠原民部太輔長棟の所せし羽張ハカゲの中よ三ノリ筋の蜷川氏に見せし所せし本末末々す此筋ハ本末末々一本末の白鳥よハ切もさらず中の外をを[△]是ハ形ヨクを以てあまのあめてと云く

一 矢若と云ハおハ射あてありともあてもさすをよるを云く
犬追物の時犬を射くは我頭をさす手へあてありと云く
あま之是々若之犬追物射手具是記ハ見たり又將の時
箭を射て矢てててをさすハ顔をあらぬのけしあて

長く之物洞記ハ見えたり

多賀高忠カ能也

一 矢若と云ハ矢のたよりたより者之津頭之矢者ハむやうしと云ハありたりと云く四目の矢者ハむやうしと云く雁股の矢者ハむやうしと云く射切と云く征矢^{イサ}劍尻の矢者ハむやうしと云くカフラマカフラマの矢者ハむやうしと云く小墓目蓋終心蓋目ハむやうしと云く射出張記ハ見えたり又犬射墓目の矢者ハむやうしと云く之犬追物の書ハ見えたりひやうといひ。魚ハといひ。ひいといひ。云ハ皆矢のそび射ありひびくと書く。トといひ。ひいといひ。あり。ひい。ひい。と云ハ皆あり。あり。あり。と云ハ皆あり。あり。あり。と云く

一 矢^ヤヶ^ケび^ビと云ハ矢を射^スて扱^ルはあ^ラう^ノ射^スハ我首を^シら^マま
 へ^テあ^らう^ノと考^ヘるを^シら^マま^シげ^ル事^ト申^スハ^ハウ前^ニ記^シ
 しく^テ矢^ノ答^ノの^ル平^家物語^ハ抄^ニ改^メぬ^元と^シ化^スる^射を^ケ射^ス
 百を^ソい^ハひ^テら^ク案^ヲえ^テう^ラや^をう^ラと^矢ヶ^ケび^ビと^何う
 又^夫未^抄は^信實^ノの^款「^及多^キあ^トの^みう^ラの^矢ヶ^ケび^ビ
 又^のれ^ぬ麻^ノの^序ぞ^妙ゆる^ト是^元う^ラ狩^ノ時^ハ款^を
 あ^をの^けて^あいと^もく^いゆ^也」^ハ事^オの^矢著^ノ
 願^をを^いむ^まきて^あう^トい^ゆて^ハ矢^ヶヶ^ケび^ビの^事異^説多^ク
 々^れる^は據^をき^傳多^ク用^うく^平家^抄は^未抄^ノ狩^ノ
 詞^記を^以て^證と^す一^矢ヶ^ケび^ビも^矢ヶ^ケび^ビと^も云^{あり}

一 矢^ヤノ^内向^ト云^ハ矢を^テら^マづ^びて^羽表^我牙^ノ方^へむ^きく^ノ
 とも^外向^ト云^ハの^相表^我む^マの^方外^へ向^くて^内向^を向^ふ
 と^云ふ^内向^的の^矢も^さう^いふ^事あり^て外^向を^バ甲^ノ矢^ヲ射^ス
 ぬ^ク内^向を^ハ乙^ノ矢^ヲ射^スて^外向^ハ陽^ノ内^向ハ^陰
 陽^ノの^矢を^先射^テ陰^ノの^矢を^後射^スる^事あり^一
 向^ノも^ハ猪^ノ相^記見^ル
 一 外^ト向^ヲ見^ハ矢^ヲ射^テ内^向を^射矢^ヲ射^テ射^テる^事あり^て急^ニ
 定^ルう^事あり^法式^ハい^ハあ^らう^事あり^れば^申の^ゆじ^をと^して
 され^ハ法^量相^大的^神拜^記ハ^定儀^ハい^ハあ^られ^ル外^向を
 とも^外射^スとも^内射^スと^定儀^ハい^ハあ^られ^ル事^{あり}を^以て

定法は、いあるるを知らず又的也語記は云見之射矢
よりして矢を射替と云ふ外向をもや射内向をも
射矢の射るは射替といふ名を射替と射る事あり
と申傳ふことあり是を考む定法は、いあるる秘事
と云ふあり

一 弓馬故実の云々也射とやと云ふ内向外を云ふは少
しちりしを云ふ弓馬も射替と射表の射る射るを云ふ
知べし是を以てし矢射へしは射替なり射る事あり
の箭に向ふる内向外は心降るは射替なり射る事あり
之射表の射る内向外は内向外は射る事あり射る事あり

一 射表を以ていふことあり

或説云ジツカカラ
ハ神頭ノ事也神頭ヲ
シラトモ云也目ナシカ
ブラトテ目ヲクリテキ
ルカブラト云是又妄説
也 追考神頭ノ
カブラト云事ハ何ノ故
ハナレトモ其名ヲ奇
妙ニ聞カセシ爲バカリノ
事也中右以來武家
ノ風此十九事多シ
神通ト云詞ハ法テ
ハ神也神通ノカゴラハ
大ニ大悲ノ智恵ノ
大ナト云類ナレ其
大ラホメテ云詞ニ実
ハナキ事也

神通ののどろ矢と云は上ぶりののどろ矢の事也實弓矢遊云
神通の痛や射るは用多し上矢の事也根はぬ不帰本を
赤漆はぬはし是ハ流漆の字依ハ痛も天子のあをばし
矢あれども漆の事ありを考むる所を射る今も赤漆を
さす是を神通と云ふ云々真丈云神通の痛矢と云は
あき物之射る方入用あり古傳書に射るは田村草紙と
いふ古き物傳は神通の痛矢とありふりて後の人の妄作
たり也かの田村草紙は神通の痛矢の事あり神通の初
神通の物之具神通の車あり是云々併法の説は神通と

扶桑見聞私記十卷
書三神通ノ鎗矢也トテ
六角ニカラマヤウ丸
物ニ目ヲアケテ目ノタリ
ニ角テ鳥居ヲ作テ
ホリコニタル形ヲ繪圖
ニテ是神通鎗矢
ト下只是亦妄説也

いふ奇妙不思倭方幸も通達するものをもたぬをわ
ていもんがなる神通の何といふものもさう方
ハあざきくはれ不後人其名は依て妄作して大切の事
いふ又天子のあそびはとあるはあつて用明天皇豊
前國宇佐八幡を始て流瀧馬を射あつたといふは
本紀其外四も記録ある事あるは信用しつゝ
此の妄説ある事なり

一 白真弓と海防の事とけつりたる白木の丸本弓あり
古款あるは志す浦弓とよみたるはけ幸と又やぶさめは周
志すもさうは白卷弓と志すもさうを略して志す浦弓と志す白卷弓

志ぬりの弓は白き皮を巻たるは志すもさうの事なり
あり寶弓兵鑑は流瀧馬ハ神通のかげり志すもさうを
持金しとけり射方聞書は流瀧馬は弓ハ年友
かたも也と有古事本は志すもさうと別

一 弓の名の射の事上御より志すもさう射りて死あすといふ事飛まつ
志すもさうを志すもさう射りて死あすといふ事飛まつ
を志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう
天智天皇所出阿麻生の物名とありは志すもさう志すもさう
んと志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう

之を以て祝儀之用也といふ
一祝は天智天皇志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう
志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう
四十一

新抄信実朝臣
の事なり
林の事なり
志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう志すもさう

種代号トテ一振弓
ト名付テ下ノ野龍
ノ頭ヲ作ルヲテ是
ノ蛇形ト云フ世ニ
云フアリ信スルヲ
云龍ト蛇トテ一物
ト思タルモ愚ナリ
蛇ハハ人等ノ龍ハ
ナリ也

リヤウトウジヤ
弓ハ雨頭の蛇をうごこせ作りくろく物と云況ありけ況亦之

用座より以てあはの蛇をうごこたりたるはあは本草綱目と雨

頭蛇の復も越王^{イニシ}所化也是を越王蛇とも招首蛇^{キシユジヤ}

と云々何れ又唐おとを樂^{ガク}廣と云人客を招て酒を呑也

壁^{カベ}に掛置る角^{ツノ}の形盃の中よりうりて蛇の形の如く見

えけりあはる盃の酒をこめて病を頓^{トク}ひたるものなり

故事と云書し何れ^{唐の弓ハ角をたけ種一}右の越王の

弩弦あり蛇も変化したるは盃中の蛇の影あどのり

思ひて弓ハあは蛇の如くどるあはる況を作りしなり

一的のこ備あはる虫^{シユウ}尤^{モウ}眼^メの^ミか^カの^ノ眼^メハ^ハ五^ノ尺^ノ也^{ナリ}

故今其大井は大的を作り射る虫尤を退治せん心くと云

況あり^{虫尤ハ唐の昔の悪念}況用^{黄香ニ交り}へるはこ備あはる人^ノの^ノ眼^メの

黒目の中のひとと云は^{シユウ}一的の黒^ノも^ハ蛇^ノの^ノ影^ノ也^{ナリ}

云へるは目何その名は書しるは目蛇は眼^メの^ノ虫^ノ尤^ノ眼^メを

己^シの^ノ眼^メハ^ハ五^ノ尺^ノ也^{ナリ}^{又いふは唐の昔の悪念}

弓は外竹内竹箭竹と云る射る射的の方へ向るをも外竹

と云ふ竹と云は我身の前へ向るを云内竹の事一

あまうりもぎの矢と云はあまうり羽と云るを誤るはあまうり羽と云

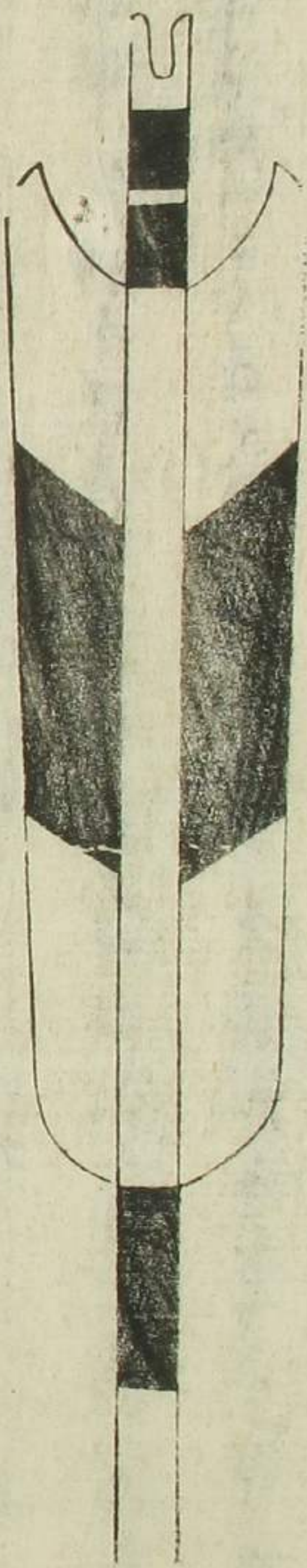
白羽と黒羽をばき合せ中黒又中白又ハつ手黒又ハつ手白

あとの如くもるは白黒のあまうりを云はるはあまうり羽と云

三好亭へ御成之記
ニ云内外竹箭竹
トモヤ之散古流之流
云前竹トモ有リ

甘藷寺定成卿ノ
秀卿草紙ニシキリ
羽トハ白羽黒羽ニテハ
キマテテ侍ルトク申傳
ヘタリ云

大木集 五月廿日
あきりもつやう
きぬハあやの草ハ
ふひきよつるゆゆ
あり



此は白羽と黒羽とニまきをつき合せて白黒のまきり
まてまきたるに書物の羽のまのまきりもあきり

まきり羽のまの古公家ノ用ハ保元元暦の記ニ執
柄供奉行幸時存生番長平藤左衛門羽右衛門
コレヲ新調烏渡羽ヲ以てニ存ニ切續キタリ云ハ久軍器
考ニんりハニ存ニ切リキタるハまきり羽ハ
あきりまきり羽ハニ存ニ切リキタるハ
まきり羽のまのまきり

本草ニシキリト云
あハハハ

并ノキノ葉ヲ火ヲ
アハハハハハハハハ

あきりまきり羽のまのまきり

あきりまきり羽のまのまきり

あきりまきり羽のまのまきり

あきりまきり羽のまのまきり

あきりまきり羽のまのまきり

あきりまきり羽のまのまきり

やまてと何り又同系 小一八宗長々をみてさうりつとつま
ありて何を在の系乃凡の上載せ官の手をひひさうあり
先へつきや凡遣と云へ盛衰記は凡遣の二字を用ひ
しう万葉集の歌は梓弓凡夜者遠音と何り凡をさ
まへーやまよるも五音相違あり

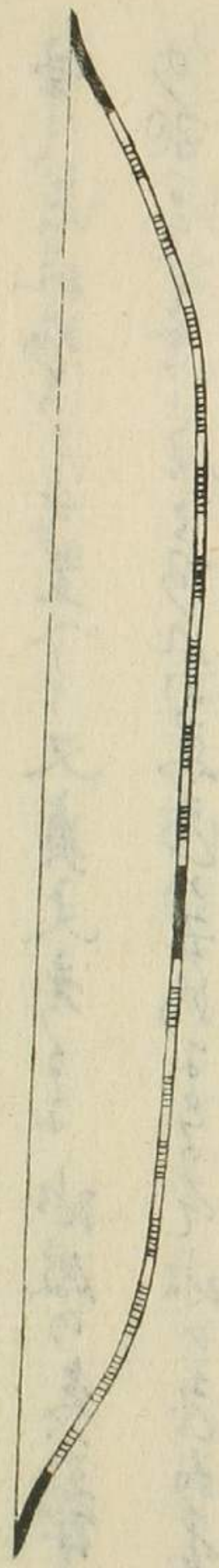
一 久志やの 幸平家物語は留巻より一束ぞうかひし
和田小太郎平義盛と云へるし書付も云へ盛衰記は
羽本一斗置て三浦小太郎義成と焼符と云へる又
同書は畠塗の之の十四束あるを只今云へるをりりり
て新居紀四郎宗長と書付と云へ又東鑑は前口巻之上注
ニハノキ

瀧口三郎藤系経俊ト云へ又太平記はお掾 國住人本間
孫四郎重氏と小刀の云へる書りけり云へる馬故実
云へるの事三方は書へるは平人云へる云へる
の事の事は書へる賞覧しりれり賞覧はせけり
の事書へるその事書へるの事書へる走り駒の通り
一方は書へる別名分斗かあり南世八國ありその名字官
それの内は誰と我名を書き中へ本名はありて云へる
犬追物記は云へ大村は云へる云へる云へる云へる
羽中ありと云へる云へる云へる云へる云へる
何れも何れも我心はありて物を書きと云へる云へる

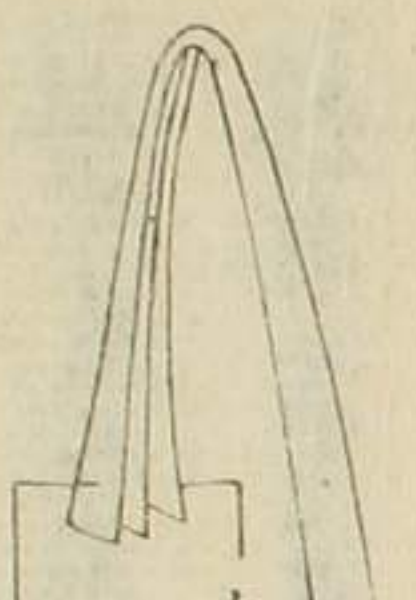
縁ある物も能くある人三日月ハ戌の時のつとを伴うるのいよの紋也
 多く貞丈按る不劣下書所ハ羽中おとす地帯もけ共々書く
 又ハ燒陰燒下の草も中書添もとも書く墨もともか小刀の先もとも
 書く又云所羽本一寸中のけても書留書より上も書く
 又國所まの官名も字も此の内誰と書くいよと云ハ的矢
 別々常々射る矢のみし是ハ名も兼斗書く一軍陣の征矢ハ八國
 所まの名も以下書く一草一かハ軍旗ハ敵ハ知れせんがも是
 犬道坊の射の矢も一又紋も書く一八人馬ハ我名をわかせま
 書るこも紋とハ家の定紋を云ハ何れも何れも七光を結うこ
 一後三年の陰ハ見元より弓袋花のめ

か〜馬鹿のめ〜

若の若げきもあり何れもあり
 此圖ハ表付きあり



一 後三年の陰ハ見元より弓袋花のめ



ケシ草
 草
 弓袋差の役馬上より持ち装束
 折る所
 筒ぬあり

一 源三位頼政がぬえと云妖物を射るれ〜弓をハ雷上動と

名つけ二のうめ 矢をハ水破兵破と名つけより水破と云
 夫ハ表鬘の羽を以てとも書兵破と云矢をハ山香の羽と云
 ともきたりと源年盛表記ハ見元より雷上動の弓ハいふ

の解るるを元す知れりしに計りて之の意いふあり故に知るる
頼政の意を以てて其後申りて何れも此の正説の如しぬるに
推量をして以てて其後申りて何れも此の正説の如しぬるに
雷上勅の頼政友政べりといひりげも頼政の如しを
以て友を志しりるが如く頼政友と名付しにこれとも
頼政友とこれの頼政の家より何れもどの友志しりるが
如くも頼政友といふべきに計りて用多たらず志れぬ
半の志れぬといへ置へり又貞丈考より水破の志は
の羽を以てて其後申りて何れも此の正説の如しぬるに
水破といふへき此又水破の山鳥の羽を以てて其後申りて何れも

山鳥の尾ハ黒き又ありて豹の皮の黄あり毛は黒き
海鳥の羽は黒きなり依て豹羽といふべきに計りて用多たらず
量の説く定めり

一 海鳥の尾ハ黒き又ありて豹の皮の黄あり毛は黒き
延喜式の内兵庫寮式に云箭四具一具ハ角大伊多都伎
一具ハ角細伊多都伎一具ハ木大伊多都伎一具ハ麻麻伎各五
十隻 爲一具具別切五十人と何り又鐵十二兩二分熟銅三分
巳上麻麻伎鐵 料用寮家物
と圖書に見り麻麻伎箭を伊多都伎と一兩
に載せりて以て考れし海鳥の志ハ征矢の如しハありて
して鉄又ハ銅を以てて其後申りて何れも此の正説の如しぬるに
的矢ありて海鳥の志

これ射の筆へ

一 浦くき弓といふ弓あり源順が倭名抄に細射の二字を出

して唐令の内は鹵簿令の細射弓矢といふを引て今

按此間 萬萬岐由卷と名づくといふ又これ射の筆は

真卷弓矢と記し又宇治拾遺物語に門部府生と云舎

人曰くして才負のりが為し浦くきを好て能く射せし其

本朝廷はつて賭射の射は百とせしめてよく侍し奉

見へり又古事談に中院入道は六の射あり才一和歌才二

双六才三末く木才四嘉曲才五管才六職者也と自稱せし也

し多し元より又園大曆は或人真卷弓といふ所の物也

或は小弓といひ或は大弓といひ侍る中園入道相國は弓

才のりは予が所は真弓は藤及樺を卷るはかひは

也近代は紙を以て皮樺はかると巻(強ひ)るといふ

是を思ふは延久文安のけ 近世御官宰相定基歟新井

統後君義孝は弓のりも好まむせしは其巻或は真

樺ともやゆの字は字書よの把中といひ和訓のりうち

平家物語才九に曰志けごりのりのちの本をかき

ひろき一寸むらうの切てをりもよはほきりこれだけの大將

軍の志りといふは元これ則真樺のりは白檀紙或は紙

を紙青唐摺木用之はと野宮殿著(あひ)も又園大曆

の硃子同一紙者様あるを考ふるると昔は皆儒道門教府生
又中院入道の浦崎を能射りりと云ハ最様成れを考ふる
弓の多ク又あるは別な浦崎とも云ふ弓あり〜とこれを能射
者にして眞丈云はきさ弓の多ク又本抄に見ら琳賢法師の
新見考べ〜 丈本抄百云天仁元年顯李卿家教各琳賢
法師一いふせん浦崎の弓の多クもこれハひきもあつは〜
ありぬ〜 硃を 一本はよしき弓とありあつはひきの少のものを考ふる〜
誤るゝよしき弓と云ふはあつはひきと考ふるゝ
矢丈揃きるゝは教上は浦崎の弓といひわよひきもあつ
つありぬ心と云へるゝ心を付て考ふる木と珠と合せ〜 硃
りを浦崎といふあり〜 才二の向ハ榊の弓といひもさ〜

〜きさハいどゞ〜 浦崎の弓といひも〜 ハ下の向はひきもあつ
つ〜 ありぬ心と云へるゝ心を付て考ふる木と珠と合せ〜 硃
りをもひきもあつ〜 才二の向ハ榊の弓といひもさ〜
〜きさハいどゞ〜 浦崎の弓といひも〜 ハ下の向はひきもあつ
つ〜 ありぬ心と云へるゝ心を付て考ふる木と珠と合せ〜 硃
りをもひきもあつ〜 才二の向ハ榊の弓といひもさ〜
〜きさハいどゞ〜 浦崎の弓といひも〜 ハ下の向はひきもあつ
つ〜 ありぬ心と云へるゝ心を付て考ふる木と珠と合せ〜 硃
りをもひきもあつ〜 才二の向ハ榊の弓といひもさ〜
〜きさハいどゞ〜 浦崎の弓といひも〜 ハ下の向はひきもあつ
つ〜 ありぬ心と云へるゝ心を付て考ふる木と珠と合せ〜 硃
りをもひきもあつ〜 才二の向ハ榊の弓といひもさ〜

ちし是令せめを不意に引かす七く又継の字をまゝといひ
 之継母をまゝも継子を捕くといふも真間の継橋を捕く
 といひ例を本と竹を継ぎ合せたる言ある故継木マキキ言とま
 まも言とある一又倭名抄に細射の字を萬萬岐由美と
 よむるは細の字に麻は對するの細は丸木言の一之振
 の麻畧あるに對して木と竹と合せたる言のこゝらに細密
 ありを以て美、岐由美は細射の二字を因てたる言一延喜
 式にええたる麻麻伎美ハ美、岐由美は美、具じり美あり
 一延喜式は麻、伎美を伊多郡伎の一族名の也又門部
 有る言、美を以て射射の美射射の射はよの美、美といふ

を以て考ふるは捕く言、捕く言、夫ハキウの的あり射る、鳥言
 弓矢あり一延喜式は弓を捕く言を記されたる美は二言
 弓矢のキ料は入用の相系組糸漆角草ホの言、んを記
 する、鰯ニの言など、見えは、延喜の頃ハ捕く言ハ
 あり、延喜の頃ハ捕く言ハあり、延喜の頃ハ捕く言ハ
 あり、延喜の頃ハ捕く言ハあり、延喜の頃ハ捕く言ハ

一 白鳥の羽をまゝも継ぎ合せる言ある故継木言とま
 まも言とある一又倭名抄に細射の字を萬萬岐由美と
 よむるは細の字に麻は對するの細は丸木言の一之振
 の麻畧あるに對して木と竹と合せたる言のこゝらに細密
 ありを以て美、岐由美は細射の二字を因てたる言一延喜
 式にええたる麻麻伎美ハ美、岐由美は美、具じり美あり
 一延喜式は麻、伎美を伊多郡伎の一族名の也又門部
 有る言、美を以て射射の美射射の射はよの美、美といふ

一 漆羽の矢古書みえりう羽のきくはきましくぬねと赤きり

金まききいあむらう黄ハ志らう思ハ現ぞこゆえがいはる

と表らうを交合むらきハ何おもをたてしゆらあふのぐを

醋スましときて黄ニツケを漆ニツケせりかいきくは又漆ニツケべりても

うましくも好し漆ニツケへし醋スをひひせれハ羽は志らうこもぬあり

何きハ漆ニツケも醋スを志のくまらへし白羽を漆ニツケせ

抱ニツケ羽ニツケ手ニツケ揮ニツケ手ニツケ概ニツケ手ニツケ拓ニツケ手ニツケ等ニツケハ皆丸木手ニツケ名日本

記三代實孫延喜式これらハ手は作りし木の名を指し

何手とびびりし延喜式は手を作りしを記しこれハ角

の料糸組集漆角羊木のりいええと紙と竹のり鏢ニツケのり木を

概手
夫木抄定家版
ふんれハらう
りこはらう
さのくい
又家集志取集
てきかりらう
らてふつき
きせぬあしれを
解り

夫木抄信実朝臣
あつさうとち
こはらう
あれ
さのくい
又家集志取集
てきかりらう
らてふつき
きせぬあしれを
解り

東鑑卷廿三
下諸國進徳之
本弓
夫木抄正三位知
家々ノ款
つるふれぬあし
の弓のその
まていつらう
即く人もあ

一 漆羽の矢古書みえりう羽のきくはきましくぬねと赤きり

一 丸木弓のり義經記忠信のり云去年文治元年十一月十三日京都

雑記十
五十

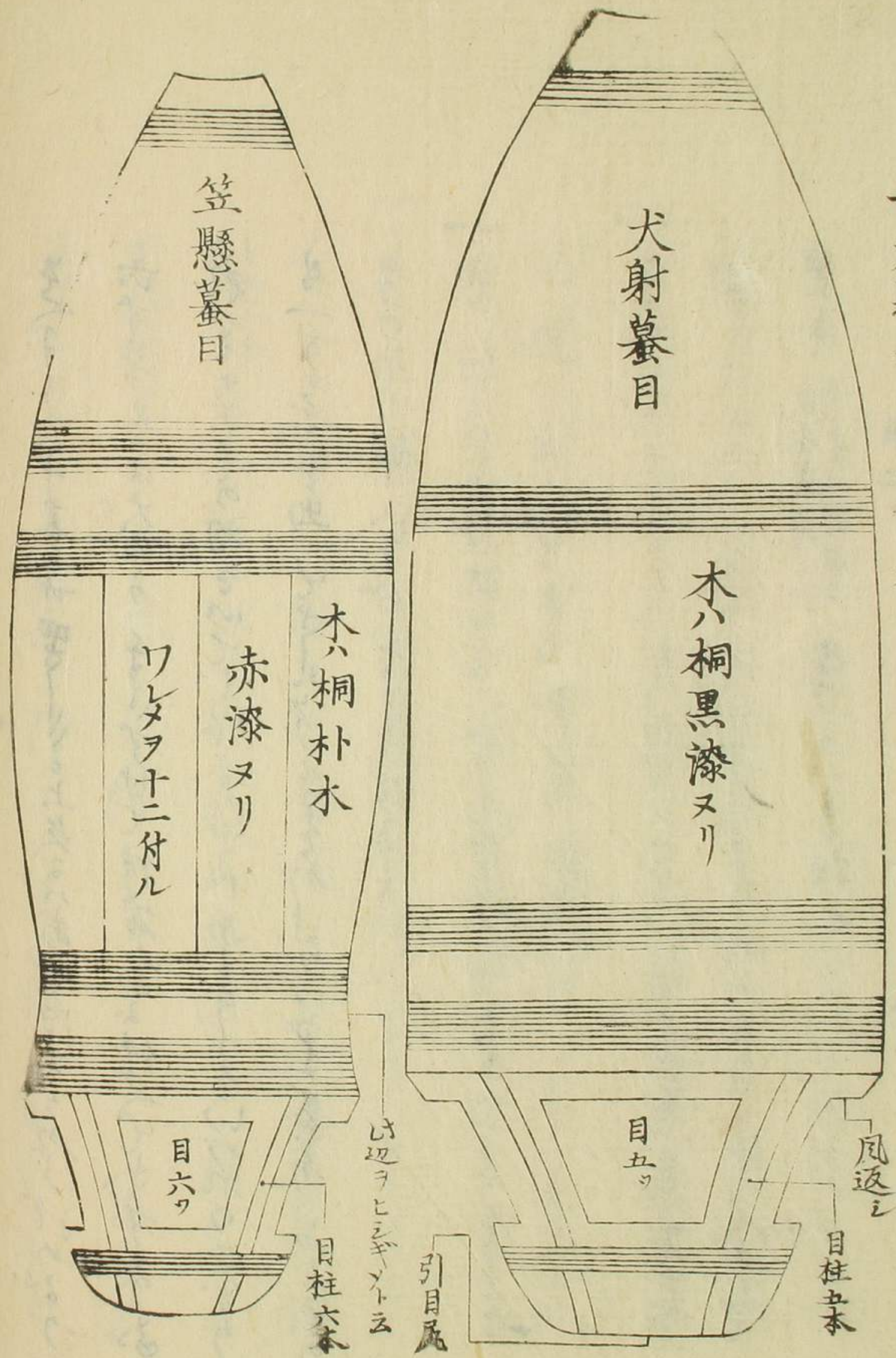
かいら出きころをれこせいつまみ多ふかの緒後こそあり
まふひをかくしこれその日の装束をまやうかせんまやうれひ
これまたまふひのむらむらきりかひのまふひあまふひをさう
此方のせん中よりまきあげたなをまげく巻くかの名を
あまふひをまふひをこわく押寄せまをく

一 ちちまふひ羽がまふひの羽こまふひの蜂こまふひの合こまふひ
ふふと云ふふふふの蜂をまふひのまふひまふひの義経記まふひの忠
吉野山合 我のまふひ 云忠信こまふひのまふひまふひのまふひまふひの
甲此結をくまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
まふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの

まふひ一大中まのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
六すまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
ねまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
まふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
まふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの

一 さく羽といたうたおのまふひの射礼覚悟記にまふひのまふひのまふひの
ハ 鶴のまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
一 ちのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
歌のまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの
まふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひのまふひの

一 犬射墓目笠懸墓目之図



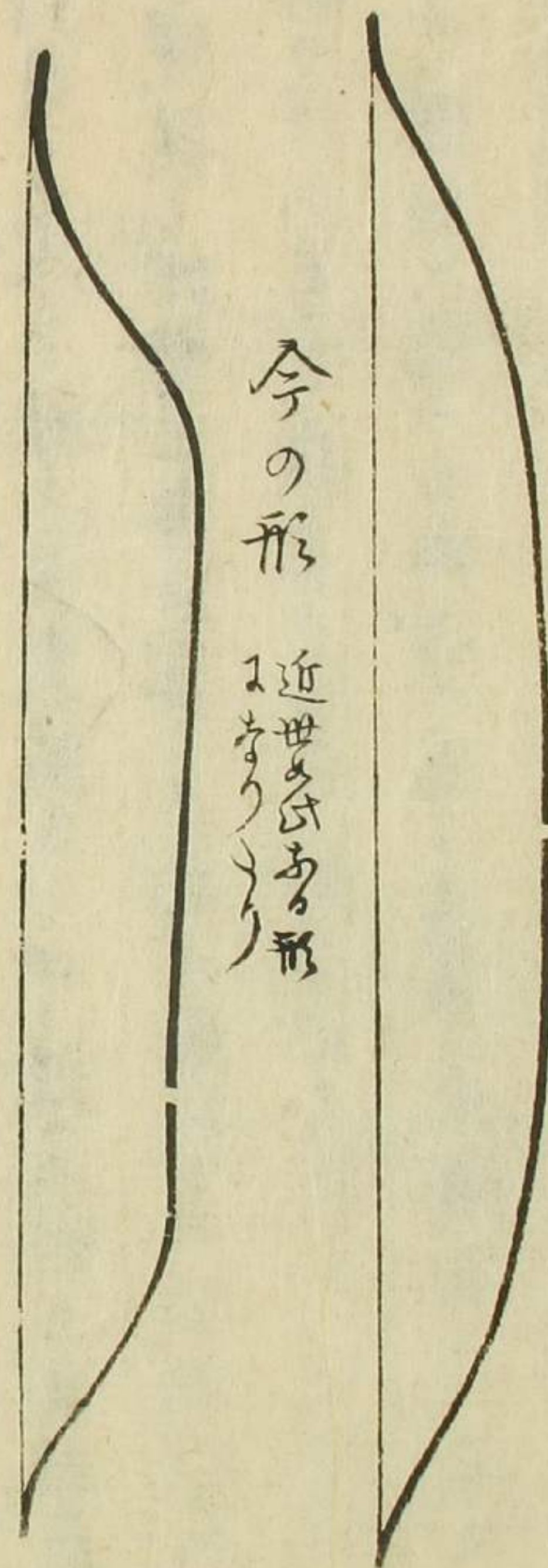
光大曰犬射墓目笠懸引目之図至て縮圖を以て口より下まで
 方へ調度模圖を以て右方の調を補合するのときの大舟
 普通之等の強弱よりして大小ありし

一 引目より人を射るもの東鑑卷之四に後若新兵衛尉墓清
 が僕従と伴勢三郎能盛が下部に關乱の時能盛馳走す
 竹の根引目より強る所の区等を射るゆえなり又同書卷
 之十に頼朝上洛のる所路の宿は遍留の時旅宿の門前を
 の若下馬せざりしを和田太郎義盛引目を以て追て射る
 則若馬よりゆえなりを捕まはるる
 引目より射例なり

一 弓の形古今を考へて其の如し

古の形 京都將軍の時代
さへいはいある形

今の形 近世よりある形
はななり



真丈按今の弓ハ四寸五分ハありき其の如し
昔より古の形のこととあれハ今ハまじき

一 犬追物イヌオモノの弓のにぎりにきき武田流射法秘傳書より其の如し

スゲ
薛管右二種
同物ニ非ス

扱アツ中ナカをあけずひくと密ヒツして巻マキき

一 弓ユミはまじりマシりを古コハ薛スゲまで巻マキるるなり射イ薛スゲまで巻マキるるなり

弓ユミを巻マキるるより弓ユミの中心ナカより弓ユミの先サキまであり現存イマの薛スゲはまじり

西ニシ三位知家チカの歌ウタよきものゝかゆはうみまのこ三浦ミウラまじり

まじりあつとつけぬつれあき あはれハ弓柄ユミカを弓ユミのたよりと
三浦ハ薛スゲの名前あり

一 弓ユミはまじりと云イハるあり東ヒガシ鑑カン書ショ卷マキ六ム 貞應三年二月廿九日
云云本年冬

比高ヒカウ飛トビ人ヒト乗ノリ船フネ流ナリ寄ヨ于ニ越エ後ノチ園ノ寺ノ泊ト浦ノ仍モト今イマ日ヒ式シキ新ニヤウ大夫ノ

朝アサ時トキ 執シツ進シン其ノ弓ユミ箭ヤ前マエ以下イカ具ツグ足タラシ於ニ若ニハ君ノ御ノ方ノ則スレバ覽ミ之ノ奥ウラ州ノ

以下群イタ糸イト弓ユミ二張ニシヤウ 假令イカ如常ニシヤウ但シカ頗ナ短ク
似ニ夷ヒ弓ユミ以テ皮カ為ル強クなり又マタ参考サウカウ太平テイヘイ記キ直チキ

上ウヘ洛ラク云イハ足タラシ利リ直チキ冬フユ八ハチ大ダイ内ナイ舊キウ跡セキ大ダイ極キョク殿テンの額ガク門カドの跡セキを皮カ

布てすし終ふは獲る征々をを就済は持せくも我牙の志草
 腹巻に夷弓持て草鞋は足単皮を著せり有り右夷弓
 拜ふらず披垂るはあつて日本の外の國こそ夷いづく唐の
 弓を夷弓と云ふへ古日本へも唐の弓渡り来りしを
 弓と云ふへは唐の弓は種きおあはれは獲るは
 似夷弓と書く一 言書は唐上別ノ國
ナリ今ノ朝鮮ノ内也
 竹箠も古きおはる我物語は云く矢や一は竹箠とあり
 毛筒弓の弓祝儀の類を云く一おく
 糸累の弓と云は是も軍弓と弓の竹の上皮をこせけし
 きし計のどのめも麻のよりあるうらもすがら本をさぐと

毛筒のあゝ巻つのも糸の巾は麦漆を付えま 麦漆ハ
毛筒のあゝ巻つのも糸の巾は麦漆を付えま
能お交る 扱神を名のぬき糸の上をせりめり
 毛と云ふとぬり能のりしめり時麻のきれあぞぬぐひ
 つやをぬきてま上をよりのつやとてぬりぬり能のりし
 腹巻を巻くは糸の糸はせんかん巻のぬり日輪巻
 月輪巻あり せんかん巻ハ十文字ハ腹巻を巻くぬり云云あり
たん巻の上の字ハ横ハ一文字ハ巻くぬり云云あり
せんかん巻の下の横ハ一文字ハ巻くぬり云云あり 月輪巻の次せんかん巻を次ぬり
腹巻の毛ハ糸の糸ハ 毛と云ふは引目くきの巻を引巻く
引目の上の腹ハ引目 以外のけあやう腹ハ獲るも心まをせぬ
引目の下の腹ハ 月輪巻を引目くきの巻の引目くきの巻の外
五不ハ 七不ハ

の友をましくけあつ
はましくいあり 何れも友のつよはましくを付て是を爲す

手突矢と云おあり惣祈矢の如くしてらへてまよとげず手

ま拵て扱げづまは突く相くせまといひ今の世の手離剣

と云おの如く手拵おあげづまはまを射るといふまといひ

突くと云く太平記卷十五正月廿七日 合戦ノ事云まは妙観院の因幡

の聖者リツキ金村ゼンソンと云塔名奉の悪僧ありクサリ礫の上は太荒目

の禮を重きて備前長刀の志のぎきつうは昔蒲形ありを服

は扱の笥の太サハヨ常の人の墓目がうまもる後あり三年

竹をぬれ竹の押割フサ子ウチは長船寺の五分整ノミ程ありを答ハズモトおま

中心ナカゴをお通ナカゴすナカゴ程ぢすクシコキ背巻の上を穿つ糸を以て

新ニは巻を巻て廿六ニを巻のこまは眞マコトひあヒと云くを

拵テツキは手衝テツキはせんニがなニ切岸の面ニ五ニ三ニは名

多タるは先年ニ并ニ寺の合戦の張ありニ百ニれて越後あり拵ニ

とく妙観院の言因幡金村といふ我より城の中の人とい

ま一の道ニせいん拵ニされては悦ニゆニ云ニまニよニ上ニまニ一筋扱

出ニて櫓の小石を突ニまニ突ニりニ時ニ久ニ保ニもニ久ニ間ニの張

はまニりニ多ニ理ニ武者のせんニあニんの板ニより後ニの総角射ニの合ニあり

裏表二重を廻て久先ニ守斗ニ出ニりニ多ニりニ多ニりニ兵ニ櫓ニより後

て二言ニもいニぢニすニ死ニりニ中ニ畧ニはニよりニくニてニ合ニ村ニをニ突ニの

因幡ニといニ名ニをニけニるニまニ

因幡とい名をけるま

一 墓目ヒキノとて獸を射取事ありと云 監卷三十四 仁治二年九月廿二日ノ条ニ云云

親衛自藍澤被歸數日踏山野クマイノミカ熊猪鹿多獲之其中

一者親衛以引目射取之北条左近將監先代未聞珍事之由諸人一同感

申云北条左近將監搦き能き引目とて射殺す事是ハ弓力の甚強きゆ

引目ヒキノ中り骨砕けて死ヒキノするありと云云記ヒキノする馬士の人

と射殺したるも同く弓力強きゆ云云

一 百矢ヒキノと云事古き事あり是ハ色ヒキノこの矢を百筋大なる筋

とて供の者フヒヒは負フヒヒしるを云云ヒキノ一太平記十七の巻山門改

白帯の羽ヒキノをもぎしる矢の十五束ヒキノ云云ヒキノガセ何りヒキノ々々ヒキノとヒキノ百矢

の事ヒキノよりヒキノ二筋ぬヒキノのヒキノ事ヒキノありヒキノとヒキノ又ヒキノ同ヒキノ事ヒキノ百矢ヒキノ二腰ヒキノ取

よせとあり二腰ヒキノと云ハ筋二腰ヒキノ乃事ありヒキノと云云

引目ヒキノ負ヒキノしるヒキノハ何ヒキノと云云

一 八目ヒキノ鑄ヒキノと云事日本紀神代卷見ヒキノうヒキノハ八目鑄ヒキノ多ヒキノ鑄ヒキノ矢

は目をハヒキノつあけヒキノしるヒキノありと云説ありヒキノ流ヒキノありヒキノ一ヒキノ神道ヒキノのヒキノ事ヒキノ

數ヒキノ多ヒキノきヒキノるヒキノハ皆ヒキノハヒキノと云云ヒキノハヒキノ百ヒキノ方ヒキノ神ヒキノ大ヒキノ八ヒキノ洲ヒキノハヒキノ五ヒキノ恒ヒキノハヒキノ雲ヒキノ三ヒキノ六ヒキノ千

代ヒキノ八ヒキノ岐ヒキノ大ヒキノ蛇ヒキノ八ヒキノ十ヒキノ氏ヒキノ人ヒキノ八ヒキノ尋ヒキノ鯨ヒキノおヒキノのヒキノ於ヒキノ皆ヒキノ數ヒキノ多ヒキノきヒキノるヒキノをヒキノハヒキノと云

云ヒキノとてヒキノハヒキノつヒキノようヒキノきヒキノしヒキノるヒキノありヒキノハヒキノのヒキノ數ヒキノハヒキノ始ヒキノの一ヒキノとヒキノ終ヒキノのヒキノ十ヒキノをヒキノ除ヒキノけ

ハヒキノハヒキノつヒキノのヒキノ始ヒキノもヒキノありヒキノ終ヒキノもヒキノありヒキノ竊ヒキノりヒキノありヒキノ心ヒキノをヒキノ數ヒキノ限ヒキノりヒキノありヒキノ多ヒキノきヒキノる

をヒキノ神道ヒキノのヒキノ初ヒキノハヒキノと云云ヒキノ八目鑄ヒキノも目の數ヒキノをヒキノとてヒキノハヒキノつヒキノありヒキノと

ありヒキノも鑄ヒキノは目をヒキノあヒキノけヒキノしヒキノるヒキノをヒキノいヒキノふヒキノんヒキノとヒキノハヒキノつヒキノ目ヒキノといヒキノひヒキノるヒキノと

夫本草卷三十三六
 怡類光俊朝臣
 の考より、
 も及び海山中は
 なる、ひとも
 こひぬるも
 的と村との間
 をモノアイト云
 物間ハもろーろ
 を以遠近を定
 る一易を数林と
 云すなり哉と
 云ふ、
 云ふ、
 云ふ、
 云ふ、

一 大切の弓矢とハあきりを考くハ白菱ヒマクギウノリの糊をつふへー白菱紫花蘭云草ノ根也

の粘も水と粘りつふへー出せきりる登之白菱ハ粘ぬる
 物と薬店とを求むべし
ニモシルス

一 弓杖と的場馬場木の間をおる弓をる家裏と云ふは
ユシブエ

弓を物間モノアイトをうる弓をるを扱左アして外件ソトを下へ
 折へー何れもよく定たる方より折へー本も守の方より折

て後とも守の方をお出せ付へ折へー又法骨ホネゆき云ふ馬
 場をおるはどげー弓を折へー定り法之又笠懸カサケ村と種

拜故裏と云ふを折へー弓を折へー但人ヒトと張弓
 出せ村ハもろーろををるは折へー弓を折へー

弓を可折もろ弓ハ器義之又云もろー弓を折へー右の

弓ひりして弦を下へ折へて丸の手を弓に添へ 例式レキは

へー折時ハ外竹上へあつへーもろー弓を折へー外竹ハ下へ
 折へー又笠懸カサケ之記云云は折へー弓を折へー折下へあつ

一 公方公方持持 宝町 以弓袋の多法家北畠 適用抄北畠 公方持軍陣の

涉弓袋ハ重カサ物モノよりその丸を二所ニ付し之丸ハ白北北ハ折へ
 せしむハ白菱ヒマクギウをハむしききも元菱ヒマクギウ之け志シは皮ヒ之志シもろー

皮ヒ之志シもろー以方持以方持考ふハ以方持袋ハ持せしむるわあき之犬の

河軍陳の耐ハ其ノ大の耐ハあるニ無紋也 主織物ハ二重織物の
有る織物の上は織

をせらるる白糸をハむらさきと申すことハ相の景也
白糸にて織ひは糸結黄糸にて糸とを云

一 雁股のり所の股又似るるあり カハルマタ

るこり カハルマタ 實ハ蛙股と書へきるあれと詞ありり カハルマタ

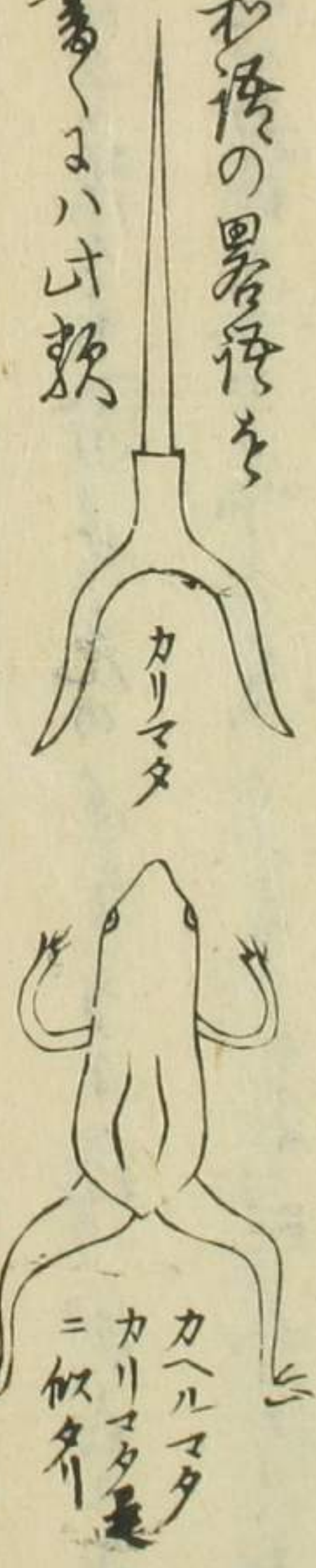
りりるれり カハルマタ 五考あり カハルマタ

め カハルマタ 一も詞の付て所の字を假名ひ カハルマタ したとハ カハルマタ

と書へきをひきめと云詞の付て引目墓目挽目あり カハルマタ

例 カハルマタ 中 カハルマタ 和語の畧字を カハルマタ

文字 カハルマタ 書へはハ カハルマタ 記 カハルマタ



カハル中畧ニテカハルカハ
カハルマタトナリ

河軍陳中竹馬
記五上キーハ
松夫のかわら
そあるをうハ
一と云へ

上サシ中サシテ
トハ別ノ由
ナリ下ニ記ス

一 上 カハルマタ の矢と云ハ腹はかり カハルマタ を上 カハルマタ さすを云へ カハルマタ

腹の正面の上 カハルマタ さすを征 カハルマタ 久をゆ カハルマタ 妨 カハルマタ あり カハルマタ 一 カハルマタ

中 カハルマタ ざ カハルマタ 一 カハルマタ と云ハ カハルマタ 一 カハルマタ 久 カハルマタ を カハルマタ 一 カハルマタ の カハルマタ 次 カハルマタ 一 カハルマタ

の カハルマタ 次 カハルマタ 一 カハルマタ さ カハルマタ す カハルマタ 一 カハルマタ 中 カハルマタ 一 カハルマタ さ カハルマタ 一 カハルマタ と カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

羽 カハルマタ 一 カハルマタ 小 カハルマタ 羽 カハルマタ 一 カハルマタ ハ カハルマタ 山 カハルマタ 名 カハルマタ の カハルマタ 尾 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

義 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

大 カハルマタ の カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

の カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ 一 カハルマタ

まづをせしめてさしうらむをかいらまよかひありまゝ今の世
の人中ぎいハもろり夫はまことふるを知らざりてうち根をきき
半とまひひ体の矢のまことまひ又ち中さしといふまゝ
對するまゝに征矢のまことまゝ何れもあやまりあり
用へう以忠の義経記の文を能考へるへしまゝをことい
まゝふゆとて蜂を食むらゆらうのまゝ矢の羽は雪の羽
と云ハふゆらうの羽のまこと高忠のまゝまゝとるまゝの羽
小羽ハ山雪の羽を付ありと見えたり義経記の中さし
まゝまゝみの羽をまゝまゝとまゝ合ひたりとあり矢ハ一まの
木の葉と見えゆれも依忠のまゝとあり中さしとるまゝのまゝ

傳ありへし

中さしとまゝハとてある
の矢のま中まゝとるまゝ

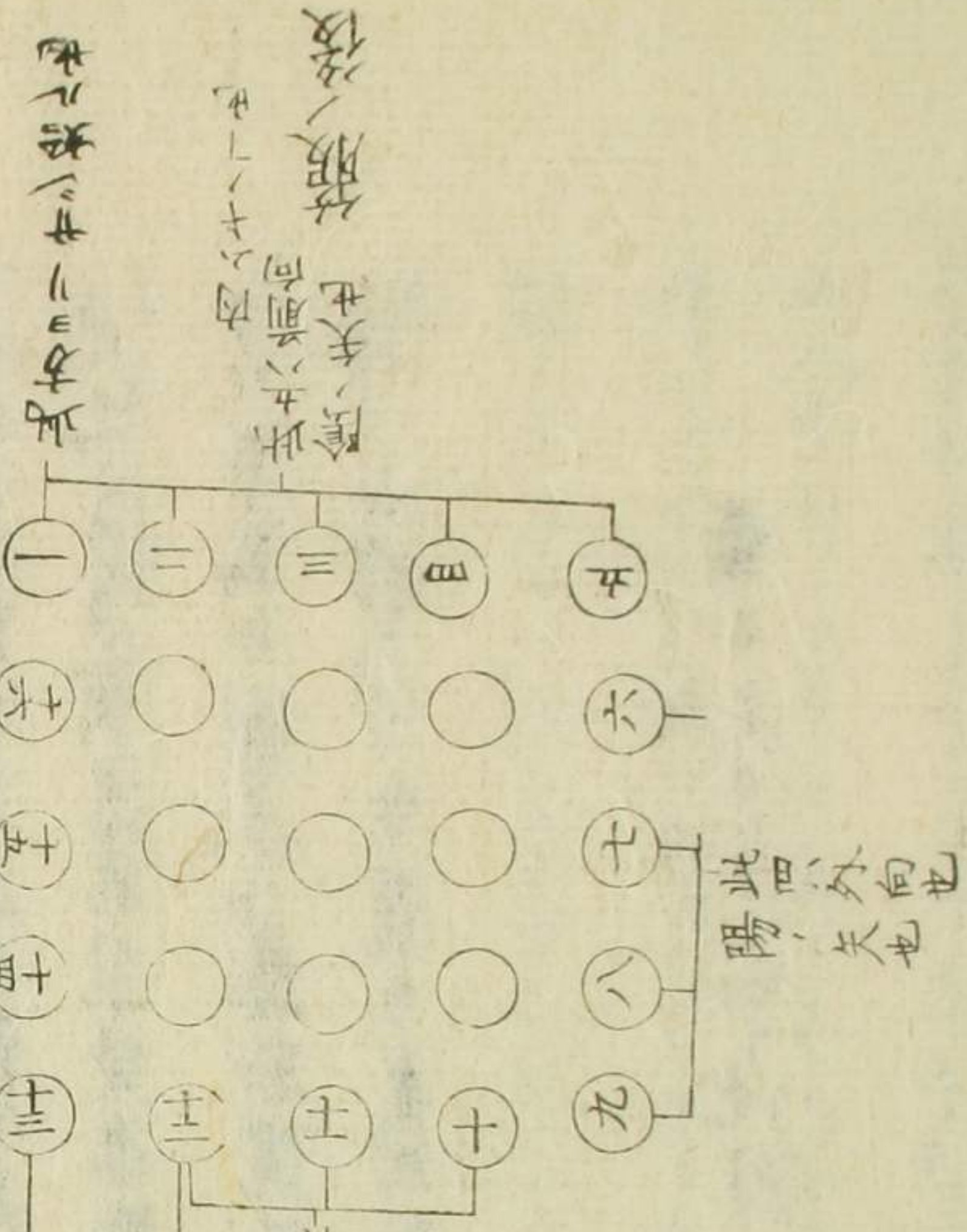
一 般に征矢^{ツヤ} 美

上さし中さしのまゝ^{給馬}花のめりしとまゝ

多賀豊後守高忠の傳へ高忠の記されし^{持朝}記は
見えたり多賀守忠ハ小笠原民部少輔持清^{後ハ傳}の門才
まゝ馬の在ん^{急照院}義政の代寛正の比の人の
傳は正傳あり^{正傳}の矢のまゝ^{やう}の傳花のまゝのめり

獲は矢のまゝやうに調

前向トハ羽ノ内向ノ矢ヲ三ツ
アル所ニハ内向ノ矢ヲサスガ
アル所ニハ外向ノ矢ヲサス也是ハ
廻リハカリノ古文也中ハ内向外向ヲ
定メズ



内ハキノ一也
此三ツハ前向也
箬ノ正面

弓法私書ニ廿五矢ノ時ナラデハ
上ガシラサズト見エタリ
上ガシサ、又時ハ中ガシモサスカラス

一 弓は巻く藤ハ正字ハ藤ノ字也竹冠ハ書ク竹冠トシテ藤ト

書クハあぢと云字之あぢハ弓ハ弓ハ書クあぢハ書ク竹冠ト云

あハ料藤とも云之東西洋考と云書ク云料藤蔓抽被地

無枝葉有皮裏其外如竹皮剥之則落長數丈不值剪

伐可繞數國○齊民要術と云書ク云料藤圍敷寸重

於竹可以代篾以縛船及以爲席勝竹○字彙ニ云藤蔓

生似竹○右の文の意ハ料藤と云扱ハ蔓出で地の上より生ひ

くぶさる枝葉もあ皮をむぐて竹の如く皮を剥けり

よしとされるもささき丈さうりもあり糸からすておけを何

れりてありて敷くを繞るなどともいひて草のやき

辨ヲ美ト云ラ
 カハサクヲノ皮
 フ巻ク事トス
 凡ハ非也

是すすまはりの内外をどあう竹よりも重寶之竹の端の代りも
 あり又糸をつあく繩も有り又細くてもして序は織るもよし
 とく弓は巻くハ右の料籐の皮をまき細きまきて巻く古
 昔は真樺マカバを巻くと云ハ籐を巻く弓をまき樺を巻くと
 云事 昔は記は籐を巻く弓をまき樺を巻くと云ハ皮をまき
 糸を巻く弓をまき樺を巻く弓をまきて巻くは給さぬあふ
 真樺と云へ海こと樺と云心し

一
 一法不は矢をまきする夏秋はうり海をよまきす春冬ハ底
 下をまきとぐり矢をまきする 春冬ハ上をまきす夏秋ハ底をまき
 とくは記は書は息えては子細をハ記はる故知人かハ本間記

の聞書より法不は矢をまきする一の底す 的矢一
 上は猪の目切るとくはうりを底をまきす一但夏秋はう
 りをよまきする一冬はうりを底をまきす一冬はうり
 をよまきする一夏秋ハ帽子の上を射んためはうり
 をよまきする一冬はうりを底をまきす一冬はうり
 切らぬ綿入の衣服着る時ハ綿ハ糸とてやうりある
 由(うり海)を見射切らぬ故にうり入の衣服はうり
 糸をよまきする一底をまきすあり

一 弓の弦ハ麻アサオ草を水は少の間ひく一頓ヤガをよまき短サラき竿サに付

て亭の志を以て息を止めてはちて出来るをかたむてこきの志し
て弦の志を以て福を以てけりて徳きしつてさす是通例と
ぬ時志しつてさすも志を以てせられてさせば強しと云われ
うさし麻まは福とさしはきしつて強きと或人云志を以て
くは婦人の志を以て婦人の志を以てしつて物用ひつてさす
貞丈云然らば男子志を以てつてさす一男もあつて又云婦人
も徳を以てけりて福あり徳水えさるるは福あり禁中の
神事と婦人二は後徳か多き一又伊勢の詠事笑茂の詠
院の天子の詠女之神社巫女神樂を奏するは男の陽之
女の陰之陰陽の天地自然を以てさす一方うけつて天地

の元はあつて依之神道とて婦人を以て事一あり其経の
様の間ハミ様を忘むはつて女人禁制といふは佛法
にてさすはつてさすは弦を以てさすはつてさすはつて
あつてさすはつてさすはつてさすはつてさすはつてさす
君の趣を以てさすはつてさすはつてさすはつてさすはつて
一弦を以てさすはつてさすはつてさすはつてさすはつて
てさすはつてさすはつてさすはつてさすはつてさすはつて
家物語に惟能はつてさすはつてさすはつてさすはつてさす
引つてさすはつてさすはつてさすはつてさすはつてさす
来りつてさすはつてさすはつてさすはつてさすはつてさす

一 弦の上せき中せきわせきと云るを音ハせきと云ふは
つるまといひて細川高國の小的之書外題小的 幸トアリ 弦下乃
法らうよりきれと云るの何ぞ

一 小笠原光清より記岡本美濃守縁侍の記を引く古化
了弦さひてと云事有り今世つれまねと云物も弦端を
考へ縮のするといひてと云ハ割出と音て縮の裁ツチ
つせのいさぬのひと古板の音用をよ割出の二字を出して
サイドと訓を付しう後撰和歌集卷七秋の節のりよ云
かまらとつらこまらつとを女のむらつらとて深のと
はか「美」る板はぬりわつ種と秋のお葉とらつまは

まら清少彼言枕草子にまききりつと云ふきぬれたる

調度

蒲萄漆

割出

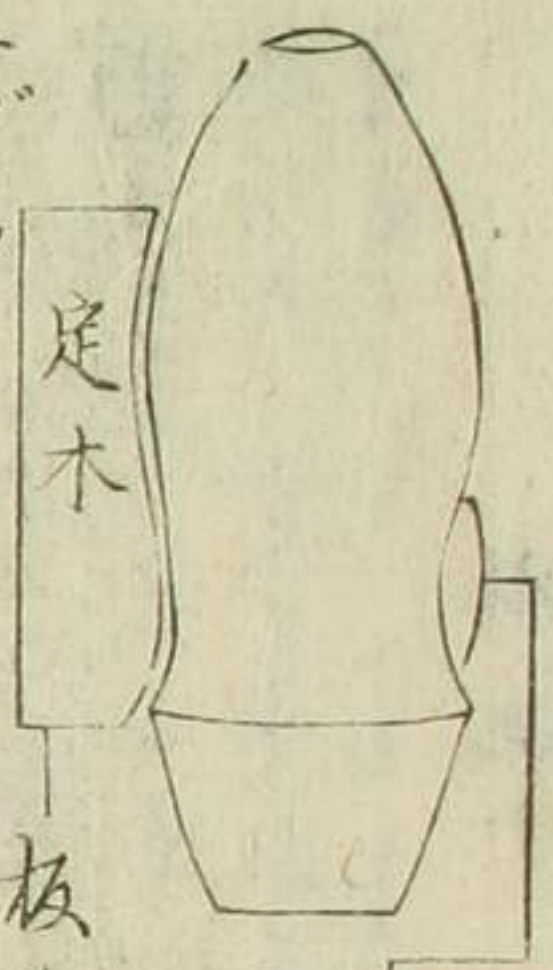
あかひむいふあまひのてうど かゝあゝあゝあゝあゝの やうい
のを「ヤ」てとさうりのあうは有りたりを見つけいふ

一 ダイ 髀の矢と云るを近世ダイの雜説を作り出せ人を惑

はする有りあまを髀は楸形あり くしを矢と云うもいふ 田舎人あつハおさげと云

矢の根をハ「く」く「よ」や「こ」む「ゆ」古製の髀はち
楸形にあき足ありをぬハ矢の根をあらわしうその底
板は「あ」て「け」版の矢う「こ」向の方よ矢一筋を是を
髀の矢と云向のよ草結のつ不ありそのつ不は髀の矢を
まて「は」髀の矢は熱の矢をうみ付く「熱」の矢の布髀よ

長巻とハ引
のそとに篋
ひき
ひき



ひきめの本巻はけらびれらあまひきめあ
十二の星まづハられぬとられぬより音をもちす
がおもひうきとをきつらうと古記あり

ユブクロ
定木
板をゆけいーらて定木まもるし

ハキソ
一 蟬目の大小ハ射子の弓の強弱よりまろいあれハ定るすはあ

弓強れば大なるをゆめり弱れば小きをゆめり射て試て大

小を定めゆめり一星の長サと横の長サの恰好つらあ人の多

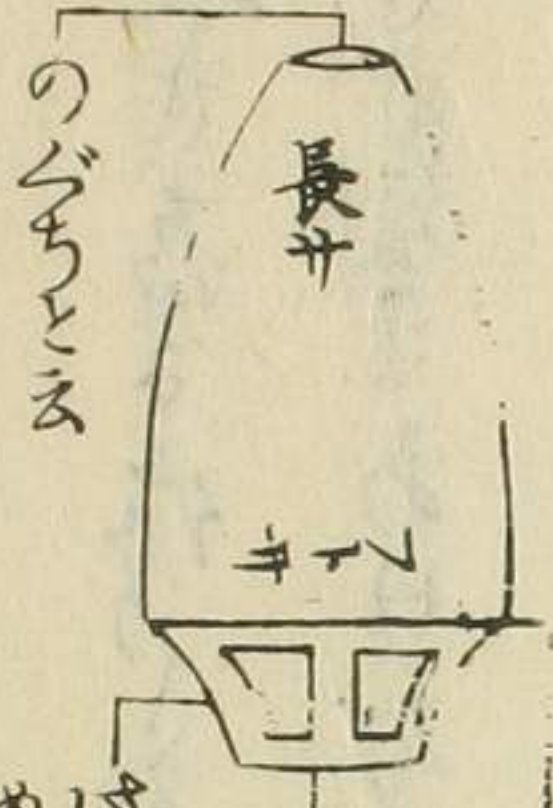
古巻よりすゆはあ一依り真丈より合恰好を考へて了

記よりすゆハ一星の長サ五寸ありハ横の長サハ六寸

まろりまろり一星の長サ
又星の長サ八寸ありハ横の長サ

ハ九寸ありハ一皆星は准一知一
の長サと横の長サ

木ハ朴糸
又ハ桐也



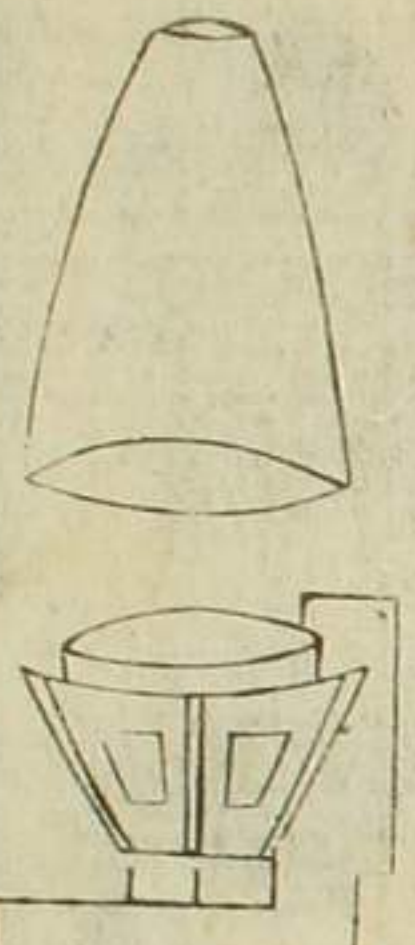
長井
ひきめあうと云
けおか中肉たを
めいりうを能ぬ
一 けおをまもるの長サと横の長サより
の長サハ引目の長サを
四におてまろり分のいけは
まろりまろりより上の長サ
まろりの長サハ懸あきを四に
おてまろりかまろり

ひきめあうの大サハきつらうのまろり
の寸をきつらうと云う寸を和ゆへり
古代ハ蟬目よりと云職

人方ハ蟬目よりと云う今ハ星と云う
強いこと

星よりと云う中をとりて後合と云う
星よりと云う

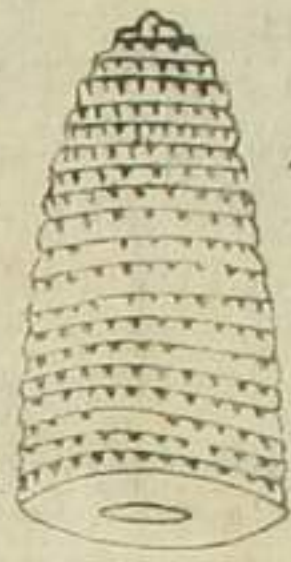
よりハ星と云うの長サと横の長サより



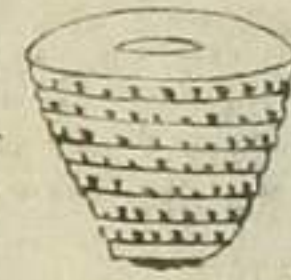
けおをまもるの長サと横の長サより
ひきめあうと云
けおか中肉たを
めいりうを能ぬ

めいりうハ引目よりけぎらうり竹をゆめり
しとあり入しとありハ引目よりけぎらうり竹をゆめり

一竹の根基目ハ竹の竹の根のまきの丸くいもつららのめく
而をまて作り根すまを墓目一ッ作り



竹の根



竹の根

合をうおのごとく中をうめへ
外もげらるべし根をよきまして合は

毛ハ外をけつらぬ時の形の中をうめへあまのすよきま
かれて後はすまよきま一ッ竹の根引目ハ目根合ふ及

墓目をうらま木をうすくうたつハ竹の音ひびきありて止し
されども竹の根の中をうすくうたつハ厚くうらまハ
鳴り音はまのうきまも竹の音ありてくたけず元来墓目の
鳴り音はまのうきまも竹の音ありてくたけず元来墓目の
鳴り音はまのうきまも竹の音ありてくたけず元来墓目の
鳴り音はまのうきまも竹の音ありてくたけず元来墓目の
鳴り音はまのうきまも竹の音ありてくたけず元来墓目の

射倒すべきるま作りくも竹の音ありてくたけず元来墓目の
あつ目をあけくも竹の音ありてくたけず元来墓目の
こつ東遊子伊勢之守能盛竹の根引目を以て
射すも竹の音ありてくたけず元来墓目の
て馬より射すも竹の音ありてくたけず元来墓目の
射すも竹の音ありてくたけず元来墓目の
まの竹の音ありてくたけず元来墓目の
やうに竹の音ありてくたけず元来墓目の
くだけ竹の音ありてくたけず元来墓目の
の奉まよハ竹の音ありてくたけず元来墓目の

一 蓋目ハ元来魔生の物を退るるに極出いり物と云ふ人
 多しあるに鳴り言ある物あるが狐狸おとを射おび
 やのする何りて鳴り言を射おびおとを射おびけおの
 とて作り出しり物とあるに極出いり物と云ふ人
 一 ちく篋の多職人盡歎合矢細工の繪の何よこれらちく篋
 とてあつていられはちく中學集は射家云うべきは子を
 さらかおあれがぬま依るにあつて古よりうきさの名物と云
 佐渡篋也又信州知久のうきさと云を用るはこれらうき
 うきさと云徳多きと云 或矢匠ノ云ウキスト云ハ篋輕クシテ水ニ入レハ浮
 不知久ト云ハ信濃國ノ地ノ名也知久ト云所アリ昔信州ハ小笠原殿ノ
 領地也シユヘ知久ノ篋ヲ用ラシナリ一カマト云ハ二年ヘタルハ鎌ニテ

一 刈ニ切ラル也三年ヘタル一刈ニ切ラレズ十タニテ切ル也一鎌ニテ刈リ
 ルハ一鎌トテ用ル也是ヲ鎌篋トモ云フ也 鎌ニテ刈ラル故ナリ
 〇貞丈云ウキストハ水ニ浮ク故ウキスト云トハ非也堅キ篋ニテモ水
 ニ浮クモノ也沈ム車ハ十キナリウキスト云ハ竹ノ肉シマラス浮キタル
 云也堅キ篋ハ肉シマリテ堅シウキスハ肉シマラス又ユヘ浮スト云ナリ水
 ニウク事ニハアラス何ノ篋ニテモ水ニウク也信州諏訪ノ人ノ云ク信州
 ハスヘテ竹ノ性悪シ太キ竹ナドハナシト云按スルニ寒國トルコニト也竹ニ
 相應セサルユニ竹ノ肉實セズシテウキスニナル也
 竹林派の書よ云篋竹ハ二年竹をいよきと云三年ハ強篋
 と云二年またうきさをいよきと云といふもさうとハあり
 乃於近年の矢師はうきさをいよきと云といふもさうとハあり
 ハ五月廿七日某月直りて月數ハ一年より二年竹あり
 今年五月廿七日竹を来八月切らるるをいよきと云
 云今年五月廿七日竹を三年めの八月切らるるをいよきと云

らよきすと云今年の五月生きたる竹を四年目の八月切
しりをも二年竹の強算と云年久しき竹をちのちの
切て一年は一錢目法のおのこをまよと云その日記あり

一 矢のまけ等を射つ廿の常と云るの的矢はかきりくさる
常の矢はよいかくは 弓秘傳書
は見しり

一 村重家の弓弓秘傳書 武田傳書
小笠原清元記 云村重家の弓を
むくくとちどしてつうひいりを云く是ハ重家の根本とする

而廿八世六合をハ六十四のつありは卷日より其余の
う、弓はずべてむうま重と云く志く此の中はより村重
藤のまゆりを定ても花いりしは傳てあると云く

一 サシエヒラ 差箆 弓法秘書云箆まきうく箆さう箆かり箆と

云ありさうう箆本心 ハコ 見元よりきくえひくと云ハ板
まて管はめくさきりうる ハコ をぬく入すむハあつ
まちやうめんをとりたる

一 カワエヒラ 華箆 射法拾遺抄云志と華志ひくあるハ略儀と云
公方極流成身と云箆は志の略儀ありさううまひ
ら本よりかき箆と云ハあめ 猪 つけしり 猪 追とさうう

箆と云ハ井の皮をかんじと云んえより華箆といハ箆
のうまをあめ 猪 皮とつみきと云
一 だう布のより弓の弦をうらめるとき 猪 田々あて古

さうりわうと云くは徳書常用抄な云たうわうの長さ四寸ありと云えり

一 基石頭ニハシカシラのり本間流聞書云角鷹クモタカの羽をハ先

白くわくまやうニハシカシラ一是をひきや花と云く又白くをちとまやうニハシカシラと云くをハ基石頭と云く又くまをのこして羽どりハシカシラを蠅頭ハシカシラと云く

一 三つ懸四つ懸ニハシカシラゆけのり細川玄首慶長八年馬聞書祀サレタル

云ゆけを四つゆけ小笠原流ニシルノオト射多射多のり本間流あり又

三つゆけ小笠原流ニシルノオトゆけ小笠原流ニシルノオトゆけ小笠原流ニシルノオトゆけ小笠原流ニシルノオト

三ツカケ四ツカケノ称アリシハホト堅クナリシハ差矢始リテ後ノ一也

ユカケ皮巻フスベセウ
ツラ水巻紐紫丈
高指ハシ指ラ紫皮
ニシツク故ハ不付軍
陣巻フスへ紐指紫家
ノ故ア付ル畧表ハシ
草コウシ皮フスへ草無
故也ヒモ皮也無故

トハ無地也指毛友
皮也巻ラヒモ指ツ
クニ用ルト云ハ不淨
フンカン為ニ用ル
也

又巻目一寸半リ
巻テ又五分斗オ
イテ一寸巻テ其上
ニ藤ヲ巻也

一 せんだん巻せんだ巻二所のりせんだん巻六分記きぬく
志げ巻弓の本管うう管のり志げ巻をりく十又巻のり
まききせんだん巻と云くせんだ巻志げ巻のり志げ巻の中地を
巻時のり志げ巻下地麻糸を漆を志げ巻つけ巻目二分志げく
巻又一分おきと又二分巻目時候志げ巻もきく巻目上をせり
うり志げ巻をぬく相返をだんく志げ巻巻目の上を巻く熱上を
らう志げ巻のりぬく上中巻すり志げ巻三所白返をつらぬ
一 せんだ巻のり志げ巻ハ千手巻志げ巻下地志げ巻より志げ巻付て麻糸を
て巻目を志げ巻志げく巻又五分巻目又五分巻目
此麻糸を巻くせり志げ巻新し志げ巻金志げ巻より志げ巻上を志げ巻

一 かつぎのやまは飾の二用一を式の例はあり
ういひあり

一 室穂のえをさかか(ま)るるを是ハ股をあらはせ
ぬのれやう物前そのまじり家の方まよふは胸遠は指を
ぬくもあらかりまじりまじり

一 板弦サカヅルのより方礼儀に決す云々の弦のよりさこの此者のさ
したるモトハガ本陣カラハネをバツク
すしてさすあをさこの弦といひはりののつふる云々

はりの松坂之職人歌合は松坂ありといふ詞あり
のあまあり○布施弦と云ハ布勢の海越中國村水郡

或云坂弦ハ京
八坂より出るを
云とあれも伊
勢の松坂の儀
を申へ

何う多胡海とも云け所之名産也○開弦と云ハ伊勢國
冥といふ所の名産也

弦を張る日置字余と云八十歳余宝永ハ比八十歳の老人の
説は夢をスヒ終夢の如くうみてかせの如くは登りあま
つけまをうけて米俵をつるこきたるが能とあは
え云く弦の若ハ出羽の山形より出るういひと云々

一 矢開マヒラキの羽ヒエトリシト、キチズミ、ムサビ
鴨 鷺 木胤 景胤とひえとりとハ
ひよをさしとちやうしとすみとハさすの尾の
細きとむさびとハのがすまのさす村御持長記云

むさひひきづくくとをハ誤し

一 鶉目梅之事 嘉建久元年九月十八日條 侯野矢即覽

之無文 深羽以鶉目梅 換之藤口卷也 又蜷川親元

の記を 羽形と云書 又つめの梅 眞模は對して梅

又上矢つめの梅をましくし 眞模は對して梅

のあまははをましくし 眞模は對して梅

一 雉目之事 小笠原引目のつめは 月の中 眞模を不詳 二つ

したるはあまは射涉拾遺抄云 二つめのを 月の中

つめのつめは 射方 眞模云 二つめのを 月の中

つめのつめは 射方 眞模云 二つめのを 月の中

フシぐノ上ノ所バカリ火ニテフシカケル
如クコガシテ外ハ白クシテ置也

一 ささり 眞の事 花は 浮せし 白く 換あり 眞く 眞黒漆

まそつ 花あり さつと 眞く 眞く 眞く 眞く

眞く 眞く 眞く 眞く 眞く 眞く 眞く 眞く

云 一 子 神流の糸 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ 眞ハ

云々永仁布衣始記云篋思塗サハシ云々此文を以て志塗
サハシトぬりぬりニある多きを記す

さび篋と云ハサキも篋の事と云ハサキハ拭篋と云

サハシノハシヲ反切バヒトナル也
依之サハシノラサビノトモ云 節の上を

漆もて葺く也の意さびとせたる心あり

一 箭はさす矢の数の事 保元物語は西八郎の朝の事

を云々する事云々矢は手はきぬれぬびつをわひて

あつた事あり矢一ツもあつた事あり中畧この軍は廿四

の矢二ツ十八の矢一ツの矢三ツ九の矢一ツの矢

けぬきとせしむる矢と云ハあびつとせしむる矢を云々箭

を一騰ニ強といふあり

一 かつ竹の事小笠原の矢箆云々舟の事けつす

カシキハ漢弁の一説云々ハ箭はて矢の事

竹を箆にあつた竹と云ハ矢と云ハ矢と云ハ矢と云ハ矢

唐の字ハ假字あり射事方書云小笠

原引目糸箆ハかつ竹の根の箆云々

箆はつづく箆の皮をけつと云々

光大曰平箆ハまざるの誤也一箭の字ウとハまざる

矢ハいつれも竹の事をも以て箆も遠くを征矢の事

の末を云りて箆もまざる形筒の事と云ハ矢と云ハ矢

夫木抄知家明
かつ竹の事云々
まざるハ箆
まざるハ箆
まざるハ箆

又一稿云竹の節とりの間をヨと云ヨハすまゝの略
評之古きは 呉林のものむうも志のせれと云せぬ
めりの多くもあつたやありけりかめりてんたつて
を知らず外の矢よいぬを以て矢若とすれは征矢と
限をその不用竹のもの所を以て若すれは

貞丈雜記十

